

二次元ドリームノベルズ

けだもの Kedamono Slave スレイブ

上田ながの
挿絵●薄稀

試し読み版

18
未 満



けだもの
Kedamono Slave
スレイブ

小説 上田ながの
挿絵 薄稀

序章	獣人	006
一章	反乱	020
二章	敗れる九尾	055
三章	陵辱の始まり	063
四章	ラミイの破瓜	094
五章	純潔の意味	125
六章	家畜	151
七章	大切な者達	189
八章	終わらない日々	202
九章	激情	229
十章	ドスケベなスレイブ	237
終章	どうぶつえん	276

登場人物紹介

イツナ

獣人の国・パリスールを治める
王女。千年を生きる妖狐。



ヴェイン

パリスールの将軍。猛将として他国から
も恐れられている。バイソン型の獣人。



ラミイ

イツナの補佐役であり、パリスール
の宰相。チーター型の獣人。



ゼグード

人間の国・ハルネシアを支配する
王。獣人を奴隷扱いする無骨者。



序章 獣人

獣人と呼ばれる存在がいる。人間の身体に、獣の力を宿した存在が……。

獣人は人の後に生まれた存在だといわれている。何が原因で、どうして獣が人型に進化したのか？ それは定かではない。神の気紛れというべきか、それとも奇跡というべきか——
—— 答えを導き出すことなどできはしないのだ。

だが、その答えを人は無理矢理にでも引き出そうとしていた。いや、引き出そうとせずにはいられなかった。

理由は単純だ。あつてはならないことであつたから……。

人は神に選ばれた存在なのだ。数多存在する生物の中で、唯一知恵を与えられた存在。道具を使うことを許された存在。獣とは根本から違うものなのだ。神が自分を模して作り出したとハルネシア聖書にもそう謳われている。

だからこそ、人は獣人の存在理由を必死に考えざるを得なかった。神に選ばれし唯一無二の存在であるために……。

そして彼らは一つの答えに辿り着いた。

獣人とは神が人間に与えた奴隷——スレイブであるのだという答えに……。

「性懲りもなくまた来やがった。ほんっと、人間ってしつこいな」

パリスール王国近郊のヒヤトラクタ平原。そこに存在するハストールの丘上に設置されたパリスール王国軍本陣にて、はあつと一人の女がため息をついた。黒い鎧を身に着けた褐色の女が……。

ただ、鎧とはいっても隠している部分は最小限である。胸元と腰回り程度だ。腰回りだつて鎧の下に身に着けたレオタード状のインナーで僅かに隠されている程度である。下腹部はインナーの上からでもはつきりと分かる程に腹筋が割れている。ムチツと伸びる太股も、逞しい筋肉で覆われていた。

その女の髪は黒である。灰色に近い黒だ。長さは肩の辺りまで。襟足の毛先が少し。ピョソツと跳ねている。どうやら癖ツ毛らしい。ただ、毛の癖はあまり目立たない。何故ならば、それ以上に目を引くものがあつたから……。耳と角だ。

そう、女の頭には耳があつた。下向きの獣——牛を思わせるような二本角が……。人には決して存在しない部位——女は獣人だつた。

その証拠に、腰回りを隠す鎧の間からは尻尾も伸びている。黒い尻尾。先端部には毛玉

のようなものがついた尻尾だ。まさにバイソンである。

バイソンの女——ヴェインは少し丸みを帯びた瞳で、遠くに見える人間達——ハルネシア王国軍の陣を睨む。距離は凡そ十キロ程だ。そのせいだろうか？ よく見えないうらしく瞳を細める。

「数は……えつと……十？ 五十？」

よく分からないのか、首を傾げる。

「はあ……数は一万近くですよ」

ヴェインの隣に立つ女がため息交じりに呟いた。金に近い淡黄色の髪をした女が……。髪の高さは腰まで届く程のストレートロング。尻だつて隠れる程である。これ程まで長い髪というのはなかなか珍しい。街を歩けば振り返る者が出てきてもおかしくはない長さとの髪だ。だが、そんな髪の高さよりもやはり特徴的なものがある。

それは、ヴェインと同じく耳だ。女の頭には、やはり獣を思わせる耳が生えていた。少し丸みを帯びた、猫を思わせるような耳が……。

この女もまた人ではない。獣人である。チーターの獣人——名前はラミイ。

身に着けている白い神官服——その腰部からはやはり尻尾も飛び出していた。尻尾も髪と同じ淡黄色。所々毛の色が濃い。これにより、見事な斑模様を描かれていた。

「ヴェイン……数えられないなら、別に口にする必要はありませんよ」

「う、五月蠅いな……。気分だよ気分」

ちよつと恥ずかしそうにヴェインは顔を赤くしつつ「それにしても一万か……結構多いな」と羞恥を誤魔化すように呟いた。

「確かに、これまでのよりも多いですね。それ程奴らも本気ということなのでしょう」

ラミイも表情を引き締める。切れ長の、猫を思わせる金色の瞳を細め、敵陣を見つめた。かなりの距離はあるけれど、ラミイの視力ははつきりと敵の姿を捕らえる。一人一人の顔まで……。

「前衛はやはり獣人ですか……」

敵の陣形は鶴翼——かくよく広がった陣形の前線に立つのは人ではなく獣人だった。彼らの頭に生えた耳や腰から伸びる尻尾がそれを教えてくれる。

「スレイブ部隊に暴れさせ、こつちを攪乱、かくらんその後本体が突っ込んでくるって策か……」
ふくむとヴェインは腕を組む。

「スレイブという言い方はやめよ」

すると、ヴェインを窘めるような声が背後から聞こえてきた。

その声の主は一人の少女である。背中の中程まで届く美しい金色の髪の少女だ。

絹のように美しく透き通った金色の髪を後頭部で結っている。その髪が風にさらさらと舞う様が実に美しい。いや、美しいのは髪だけではない。少女の見た目もその髪に見合うだけのものだった。

ラミイやヴェインよりも頭二つ程小さく見える少女の顔立ちは、精巧に作られた人形のように整っている。美しい宝石のような紅い瞳に、真つ直ぐ通った鼻梁^{びりょう}。艶やかな唇。街を歩けば十人中十人が思わず足を止めて見返すだろう。それ程に美しい。

そんな少女も獣人である。二本の耳に、九本の大きな狐の尻尾を持った人にあらざる獣名はイツナ——パリスール王国の建国者にして、女王である。ただし、見た目は十代半ばくらいの少女にしか見えない。二〇代前半程度に見えるヴェインやラミイよりも明らかに年下だ。

だが、イツナの齡は一〇〇〇を超える。そう、イツナはただの獣人ではない。獣神ともいっていい妖狐なのだ。

「獣人は決して奴隷などではない。人と変わらぬものじゃ。じゃから決してスレイブなどとは言うな」

東方で神に仕える巫女と呼ばれる神官が身に着けている白い衣装に身を包み、静かに告げる。

「……そうっすね。確かに……オレのそのえっと……は……配慮？ うん、そう、確かに配慮だ。えっと……配慮不足でした。すみません」

イヅナの言葉に素直にヴェインは頭を下げた。

「分かればよいのじゃ」

彼女の言葉に頷きつつ、イヅナも敵陣を見つめると――

「……ゼグードが来てるな」

鈴の音のような声で呟いた。

「ゼグード？ 誰でしたっけそれ？」

「はあ……ハルネシアの王だ」

呆れたようにため息をつきつつ、ヴェインの問いにラミイが答えた。

ゼグードⅡファルムⅡハルネシア、人間の王国ハルネシアの王。スレイブにするために各地の獣人を捕らえるよう触れを出した人物である。確かに、ゼグード以前にも人間達は獣人を捕らえてはスレイブとしてきた。しかし、ゼグードほど大規模に――獣人の国であるパリスールと戦争まで起こした王はいない。犠牲者まで出して奴隷を得る意味などないからだ。それなのに彼は戦争を起こした。人間に並び立つような存在などあつてはならない――などという理由で……。狂人といっても過言ではないのだろう。

イヅナ自身、ゼグードを見たことはない。だが、ハストールの丘に正対する位置にあるフォブスの丘に敷かれた敵本陣に立つ旗印は間違いない。ハルネシア王のものだ。目を凝らし、よく見る。中央に置かれた床几しよくぎ。そこに黒色の鎧を身に着けた男が座っていた。ヒゲを蓄えた大柄な男——多分、この男がゼグートなのだろう。

「それにしても……王自ら出馬とは……。一万という数から考えても、今回はかなり本気のようにすね」

「じゃな」

ラミアの言葉にイヅナは頷く。実際、これ程の大軍を敵が動員してきたのは初めてのことであった。これまでは多くても五千程度だったのだが、まさかその倍になるとは……。しかも、将軍ではなく王が自ら指揮を執っている。

（最初の侵攻から一年——成果を出せないことに業を煮やしたか……。ゼグードは本気でパリスールを滅ぼすつもりじゃな。じゃが、そうはさせぬ。ゼグードよ、貴様は必ず後悔することになるぞ）

イヅナはうつすらと口元に笑みを浮かべた。

*

圧勝。そう、ゼグードは今回の戦で圧勝できるはずだった。

獣人達の身体能力は人に勝るものだ。しかし、知能面においては人間に劣るものが多い。それに、数という面においても人間は獣人を圧倒していた。

ハルネシア軍一万に対してパリスール軍は凡そ二千。話にならない戦力差だ。戦力差を利用して、鶴翼で包囲する。それで戦は終わるはずだった。

だが、ハルネシア軍は押されていた。前線に立つ一匹の黒い獣人と、彼女が率いる獣人部隊によって陣形は食い破られようとしていた。

バイソンを思わせる女獣人——巨大な棍棒のようなものを振り回し、次々と兵達を薙ぎ払っていく。その力は棍棒の一振りでも五人の兵を吹き飛ばす程のものだった。しかも、ただ力が強いだけではない。防御力も明らかに人のソレを凌駕りょうがしていた。

彼女を止めるために放たれた矢を、避けることなく身で受ける。だが、刺さらない。矢尻は鋭い刃のはずなのに、鎧だけではなく、剥き出しの下腹部に当たっても、彼女を傷つけることは不可能だった。肉体こそが鎧そのものともいえるべきか……。

強く、硬い敵——止まらない。兵達が蹴散らされていく。

「……陛下、奴らの突進力が強すぎます。このままでは陣形を突破され、この本陣にまでなだれ込まれかねません」

そうした戦場の有様に、重臣のレドが焦ったような様子で進言してくる。確かに彼が言

う通りの状況だった。

「……スレイブ部隊の動きが鈍すぎる」

それもこれも敵を足止めするはずのスレイブ連中がまともな働きをしないからだ。奴らの力ならば、防御力はまだしもパワー面では黒い獣人にも負けることはない。だというのに、獣人部隊の動きはあまりに鈍かった。人間の兵に劣るといつても過言ではない。

「首輪で制御してはおりますが、やはり同じ獣とは戦いたくないらしく……その意思が邪魔をしているようです」

スレイブ達には首輪を付けてある。魔法の首輪だ。付けられた獣人は人間の命令には絶対服従しなければならぬ。今回も敵を倒せと命令を下している。だが、その命をケダモノ達は拒んでいた。結果、まともに働くことができなくなってしまっている。

「首輪の魔力量を上げろ。命令を強化するのだ」

「……しかし、そんなことをすれば奴らの人格が壊れます。命令が解ければ廃人に……」
「構わぬ。しよせんは獣だ」

容赦なく命を下す。これを受けたレドは「はっ」と頭を下げると、すぐさま魔術師達に指示を出した。

これに従い、魔術師達は首輪に流す魔力量を上げる。

すると、前線の動きは劇的に変わった。スレイブ達が活発に動き出す。まさに獣のような「オオオオッ」という唸り声を上げながら、敵部隊に飛びかかっていった。

これにより前線を疾走していた黒いバイソンを思わせる角を持った獣人が率いる部隊の動きが止まる。

「これで終わりだ。後は囲んで潰せばいい……」

女王イヅナによって千年統治されているパリスール——その歴史もここで終わるのだ。ゼグードは笑った。

だが、その時、戦場に異変が起きた。

「なんだ？」

戦場の中央に一人の少女が出現する。一見すると十代半ばにしか見えない少女が……。狐の耳に九本の狐の尻尾を持った獣人だ。

「狐……九本の尻尾？ まさか？」

その少女を見るのは初めてのことだ。だが、すぐに彼女が何者かに気付く。間違いない。あの少女こそがイヅナだ。思わずゼグードは床几から立ち上がった。

その瞬間、かなり距離が離れているはずなのに、間違いなくイヅナはゼグードへと視線を向け、笑った。

それと同時に変化が起きる。魔術師ではないゼグードでも分かる程強大な魔力——いや、妖気とでもいうべきものがイツナに向かって集中を始めた。

「や、奴を！ あの女を狙え！ あの女だっ!!」

嫌な予感がした。だから慌てて命じる。その命を魔術師達が前線に飛ばした。これに従い、兵やスレイブ達が戦場に立つイツナに向かって突撃を始める。

が、その突撃を黒の獣人達が防いだ。時間が稼がれる。

結果、イツナの力は解放されることとなった。

「なんだ……あれは？」

イツナの身体に変化が起きる。小さな彼女の身体から伸びる九本の尻尾が巨大化した。一本一本が人の身の数倍はありそうな大きさへと変貌する。同時に巨大な妖気が溢れ出した。本陣とイツナとの距離は凡そ五キロ。だが、肌がピリピリと震え、鳥肌が立つ程の怖気を覚える。人間の魔術師では絶対に到達できない程の力を感じた。

「奴を……早く奴をつ!!」

ここで止めなければならぬと本能が叫ぶ。部下達に必死に命令を繰り返す。だが、遅い。イツナの力が解放される……。

「なんだこれは……？」

そして、次の瞬間、呆然とゼグードは呟いた。

兵達が倒れている。千に近い兵が、瞬きの間に倒されていた。いや、それだけじゃない。スレイブ達が解放されている。彼らに付けていたはずの首輪が、すべて外されていた。

「何が起きた？ 何が？」

わけが分からない。イツナの力が解放される瞬間を見てから、ここまでの時間は一秒に満たないはずだ。それなのに……。

「まさか……これが……あの……」

そこで思い出す。イツナという妖狐の噂を……。

「九尾の狐……獣人の女王イツナは時を止める力を持っている……。まさか……これが……こんなことが……」

時を止めるなど信じられないし、信じたくなかった。だが、現実はこれだ。多分イツナは時を止め、停止した時の中で妖気を使った大規模攻撃を行ったのだろう。兵を倒し、首輪を外すという行為を……。そうとしか考えられない。そうでなければこの現実を説明することなどできはしない。

この事態に驚愕したのはゼグードだけではない。当然兵達も恐慌状態に陥った。戦闘を

続行できるような状況ではない。わけが分からぬ事態に兵達は恐れ、逃亡を始める。将軍達が慌てて彼らを止めようとしますが、言葉など届かない。一瞬で前線は崩壊してしまった。

「陛下……」

レドが青ざめた表情を向けてくる。

「……分かっておる」

ギリツと奥歯を噛みつつ頷いた。最早、戦を続行できるような状況ではない。

「撤退命令を出せ。兵を引く」

「はっ！」

すぐさまレドは魔術師達に指示を下し始めた。

その姿を見つめつつ、血が滲みにじそうな程強くゼグードは拳を握り締めた。

人がケダモノに負けるなどあつてはならないことだ。ケダモノは神が人間に与えてくださったスレイブに過ぎないのに……。そんなものに負けるなど……。

（だが、だが……。だがあああつ!!）

しかし、ゼグードの心は折れない。萎えかけた心を強い意志で支えるように――

（これは敗北ではない。そう、これは始まりなのだ。イツナ……貴様らケダモノ共の滅びの始まりでしかない。それを貴様はすぐに知ることになるのだ。刻み込んでやる。貴様の

身体に、心に——人間こそが主人だということを……。そして時を止める程の九尾の力を余のものにしてくれる……。必ず！ 必ずだっ!!)

拳を強く握り締めたままではあるが、心の底から笑みを浮かべるのだった。

一章 反乱

「イツナ様……いつも私達を守ってくれてありがとうございます」

ハルネシアとの戦が始まってから二年——ヒヤトラクタ平原での戦いからちょうど一年が過ぎていた。あの戦以後も、ゼグードは自ら軍を率いて幾度となく攻撃を仕掛けてきている。つい一週間前にも野戦があったばかりだ。

本日はその戦いの戦勝記念パーティーである。

戦時中にパーティーとは如何なものかとも思うが、こういったことは戦の最中だからこそ重要だ。戦争中ということ、ともすれば暗くなりがちな皆の心を明るくすることができるところ……。

「うむ。ありがたいな」

パーティー会場である王城パリアファスの広間にて、幼いウサギ少女から差し出された花束を受け取ると、イツナは満面の笑みを浮かべて少女の頭を優しく撫でた。

「お疲れ様です」

功績を挙げたものに対する勲章の授与や、国民に対する挨拶を終え、ようやく人心地がついたイツナに、ラミイが声をかけてきた。

「すみません。イツナ様に色々お手数をかけてしまって」

「構わぬ。ラミイにはその分世話をかけてるからのう」

イツナは一〇〇歳を超える妖狐である。ある意味では旧世代の獣人だ。だからこそ、政治には関与らないようにしている。その世代のことはその世代の者がすべきことだからだ。故に国政からはほとんど手を引いている。実際に国を動かしているのは宰相であるラミイだった。そういつた点で負担をかけてしまっているからこそ、式典などの行事にイツナは積極的に参加するようにしている。

「……それより、どうじゃ？ この間の戦で捕らえた捕虜達は？」

「その点は問題ありません。いつも通りに対応しております」

「そうか……それで、何人が？」

「今回捕らえた敵兵五〇〇人の内……獣人が二〇〇……それと、人間が五三です」

問いかげにラミイは一瞬顔を硬くした後、淡々と答えた。

捕虜として捕らえた敵の内、獣人二〇〇人と人間五三人がパリスール国民になるという意味である。

「拒絶した連中の措置は？」

「いつも通り国境付近で解放するように手を打ってあります」

抑揚をあまり感じさせない口調で告げてきた。彼女が見せるこの反応に、イヅナは口元に苦笑を浮かべた。

「やはりこの処置については不満か？」

「はい、不満ですね」

誤魔化すこともなく、はつきりとラミイは頷く。

「捕虜の中から我が国への移住を望む獣人を受け入れるというのは分かります。ですが、人間までというのはやはり……。それに、断った者を解放するというのも……。結局彼らはまた敵となって戻ってくるだけではないですか」

「それは……。確かにその通りじゃ……。じゃが……」

「イヅナ様がおっしゃりたいことは分かっています。人間とだつて分かり合える。こちらが丁寧な対応をしていけば、いつか人間側にも獣人を同等な存在として受け入れてくれる者も出てくるだろう——ということでしょう？」

「分かっておるではないか」

「……小さい頃から耳にたこができるくらい聞かされてきましたから……。貴女に」

「それもそうじゃな」

ラミイは幼い頃に両親を事故で失っている。イヅナはラミイの両親とは旧知の間柄であり、結果、彼女を引き取る事となった。幼い頃から今日まで、ラミイを育ててきたのはイヅナ自身である。だからこそ、イヅナの考えをラミイはよく理解してくれていた。

「実際、初期に入ってきた人間と獣人の関わりはかなり深いものになっています。中には交際をしている者達もいれば、結婚したという者も……。とはいえます。世の中そんなに甘くはありません。実際今回捕らえた者達の中にも何人か前に見た者がいました。彼らは解放された恩など感じてはいません。むしろ捕らえられた屈辱を晴らそうと考えている者が多数です」

考えは理解してくれている。ただし、それを正しいと思っているか否かは別だ。

「だからこそ、本当は投降してきた人間を我が国で受け入れることだって反対なのです。獣人ならば信用できませんが、人間は……潜入した連中が反旗を翻す可能性だってあり得るのですから……」

「その点に関しては手を打ってあるじゃろ」

パリスールに降ることを決めた兵達には数日をかけて特別な魔法「制約」をかけている。獣人達に対して強烈な敵意を向けられないようにする魔法だ。魔法で意思をねじ曲げる

——本当はしたくないことだが、投降者の中に敵の間者が紛れ込む可能性を考慮すると致し方がないことだった。故に、最低限の措置として投降の意思を確認する際、魔法をかけることを説明している。

「分かっています。分かっていますが……万が一を考えると……」

国の宰相としての責任感か、ラミイはどこまでも真面目だった。

「ラミイ……ありがとうな……そしてすまん。お前にばかり責任を押しつけて……」

そんな彼女の頭を撫でる。背が小さいので必死に背伸びをしながら……。

そんなイヅナの行為にラミイはしゃがみ込むと、ギユツとイヅナの身体を抱き締めてきた。そんな彼女の頭を優しく撫で続ける。これにラミイは「ちよつと感情的になってしまいました。ごめんなさい……お母さん」と呟くのだった。

「落ち着いたか？」

「ええ……まあ……」

普段通りのラミイに戻る。あまり感情を表に出さない静かな顔立ちで——

「……では、私は仕事に戻ります」

と、告げてきた。

捕虜達に關することはもう口にしてこない。あれは本当にただの愚痴のようなものだったのだろう。

何事もなかったかのように広間から出て行こうとする。

「いや、待て」

そんな彼女を引き留めた。

「なんですか？」

「なんですか何も……お前はパーティーを楽しんでいかないのか？」

「……仕事がありますから」

「いや、今晚くらい大丈夫じゃろ。少しは息抜きをしたほうが妾わらわはいいと思うぞ。そのほうが仕事にも集中できるじゃろうし」

「ですが……」

「本当にこそ真面目じゃなあ。それじゃから男の一人もできんのじゃ」

フツとちよつと口元に笑みを浮かべながら告げる。

「なっ!? そ、それとこれとは関係ありません!!」

イヅナの言葉にラミイは過剰な反応を見せた。

「関係なくはないと思うぞ。なにせ、お前は子供の頃から勉強勉強で、大人になっても仕

事仕事じゃ。それで男ができるはずもない。恋愛を知らぬとは……母として可哀想で……」
「よ、余計なお世話です！ 私には国を動かすという大事な仕事があるんですから!! 第一、イヅナ様にだけは言われたくありませんよ！ 千年以上生きてるくせに男を知らない千年処女のイヅナ様にだけはっ!!」

「んなっ!? そ、それを持ち出すのは卑怯じゃぞ！ 妾はやむを得ぬ理由があつて処女というだけで、別に男を知らぬわけでは……。恋愛くらいそれなりに……」

「身体の関係もない恋愛なんておままごとみたいなのです。第一、女王であるからつて理由で気さくに接してくれる男がいなかったって昔散々私に愚痴ってきたのは誰でしたっけ？ 恋愛はそれなり——とか、そんな嘘はつかないでください！ それで私が可哀想とか……片腹痛いですよ」

「い、いったなああつ！」

「そっちこそっ!!」

狐とチーターは睨み合い、バチバチと火花を散らせた。

「また親子喧嘩っすか……ほんつと、仲がいいっすよね」

二人の間に割って入るような言葉が向けられた。二人揃ってそちらを睨む。

「二人ともまだまだ若いなあ」



立っていたのはヴェインだった。ヘラヘラとした笑顔を浮かべている。そんな彼女の脇には、一人の狼少年が立っていた。少年の名はリンク。ヴェインの幼馴染みにして、ヴェインが率いる黒獣隊の一員である。

「ちよつ、だ、駄目だよヴェイン。イズナ様達はお仕事の話をしてる最中かも知れないのに邪魔しちゃ」

「いやいや、そんなことないって。今のやり取り見てれば分かる。間違いなく痴話喧嘩だよ。付き合いが長いオレには分かる。間違いはないっ!!」

自信満々にリンクに告げつつ「当たり前でしょ？」と軽い口調で問うてきた。その上でイズナ達の答えを待つこともせず「で、喧嘩の原因はなんなんっすか？」と重ねて尋ねてきた。

これに対してイズナとラミイは顔を見合わせると「別になんでもない」と答えた。

「ふくん、そっか……それならいいっすけど、二人はこの国の大事な人なんっすから、恥ずかしい姿は自重したほうがいいっすよ。んじゃ……オレ達はまだまだ食い足りないの……。行こうぜリンク！」

「あ、うん」

二人はツレだって色とりどりの料理が並べられた立食スペースへと歩いて行った。こち

らに見せつけるように――

「そういえば東地区に美味しい肉の店ができたらしいぜ」

「え？　ほんと？　それじゃあ今度一緒に行ってみようか？」

「ああ、決まりだな！　へへ、リンクとお出かけ……楽しみだなあ」

などと楽しげに会話をしながら……。

そんなヴェイン達の後ろ姿を見送りながらイヅナとラミイは揃ってため息をつく。

「あれであ奴ら、付き合っていないんじゃない？」

「……らしいですよ。いつも一緒にいるくせに、恋人同士じゃないらしいです」

「実は裏で交際しているとかってことは？」

「ないですね。だって相談されましたから……」

「相談？」

「付き合うにはどうしたらいいかって……」

「因みにどっちからじゃ？」

「二人からですよ……。二人で別々に私に相談に来て、私が素直に気持ち伝えればいいっていったのに、関係が壊れるのが恐いとか……。正直、ひねり潰してやろうかと思いましたが……本気で」

「は、ははは……」

ラミイの目つきが変わる。それに対し、イヅナは乾いた笑いを浮かべることしかできなかった。

*

自分が女らしくないことをヴェインは重々承知していた。女らしいどころか、自分は男よりも男らしい——ときえ思っている。それも仕方がないといえれば仕方がない。高い身体能力を見込まれ、幼い頃からイヅナの護衛役になるべく育てられてきたのだから……。

別にそのことを恨みになど思っていない。むしろ誇りだ。若くして女王を守る近衛部隊黒獣隊の隊長になることができたのだから……。

しかし、最近、少しだけだけれど、もう少し別の生き方はなかったものかと考えるようになっていた。

その理由はリンクにある。

幼馴染みのリンク。昔から野山を駆け巡ってきた友達。姉弟みたいに共に育ってきた相手だ。そんな彼に恋をしてしまった。一体いつから好きになったのか？ ということは正直分らない。恋は突然に——とでもいうべきか。気がつけば「ああ、オレ……こいつのことが好きなんだなあ」と思うようになっていた。

結果、ヴェインは考えるようになったのである。もう少し女らしくは生きられなかったのか？ ということを……。女らしくない自分をリンクが恋人として受け入れてくれるとは思えなかったから……。

その結果、ヴェインはしばらくウジウジと悩むこととなった。今からでも女らしくなることはできるのだろうか？ 女の子っぽい服装を試してみたり、女の子らしい仕草を取ってみたりもした。しかし、どれもしつくりとはこなかった。自分が自分でなくなってしまうような気さえした。

そんな時のことである「最近どうかしたの？」とリンクに問われたのは……。幼馴染みだからだろうか？ 彼はヴェインの変化に気付いてくれていたのだ。それが何となく嬉しかった。だからだろうか？ 気がつけばヴェインはリンクに話していた。

「オレって女の子らしくないだろ？ 身体は筋肉塗れだし、名前だってなんか厳つい……。だから……頑張ってみようかなって。女の子らしくってのをさ……。そうすればもう少し可愛くなれるかなって」

ということ……。

それに対しリンクは言ってくれた。

「そんなことする必要はないよ。だって、ヴェインは今でも十分可愛いから」

——と。

正直信じられなかった。ただのお世辞だと思った。でも、リンクは本気だった。

「僕は嘘なんかついてない。ヴェインだったら分かるだろ？　僕は本気だよ。ヴェインは可愛い。自信を持ってもいい。ヴェインは女の子だよ」

付き合いが長いからこそ分かる。彼は嘘についてなどいなかった。本気で自分を可愛いと思ってくれていた。

だから——

「好きだ。リンク……オレ、お前のことが好きだ」

戦勝パーティーの夜、イズナやラミイと別れた後、ヴェインはリンクに告白をした。美しい夜空が見える城のテラスで……。

この告白にリンクは驚いた様子で瞳を見開いた。心の底から驚いた顔。まさかヴェインから告白されるなんて思ってもみなかった——とでもいうような顔だった。そんな顔をしたまま、リンクは固まる。無言でただこちらを見つめてきた。

「……あ、す、すまない。その……いきなり迷惑だったよな」

こんな驚き方をするということはつまり、リンクは自分のことなんてなんとも思っていないなかったとそういう……。何だか涙が流れそうになってしまう。

「ご、ごめん……」

反射的に彼に背を向け、この場から逃げだそうとした。

「待って」

しかし、手を取られてしまう。引き留められてしまった。

「えっと……その……ごめんヴェイン。僕も驚いちゃって……その、まさかヴェインから告白されるなんて思ってたなかったから……。だって、その……ここで今日、僕……ヴェインに告白しようと思ってたから……。だから……」

「……こく……はく……?」

今度はヴェインが瞳を見開く番だった。一瞬聞き間違いか? とも思ってしまう。けれど、間違いなど何もなかった。あの時と、自分を可愛いと言ってくれた時とリンクは同じ表情を浮かべていた。

「好きだよ……ヴェイン」

はつきりと想いを伝えてくれる。

「……リンク……」

先程とは別の意味で涙が流れてしまいそうだった。というよりも、実際流れた。ポロポロと涙を零しつつ、ヴェインは幼馴染みの身体を強く抱き締めた。

「お……オレ達……両想い？」

「うん。そうだよ。大好きだ……ヴェイン……」

もう一度想いを口にしてくれる。それと共にそつとリンクは唇を寄せてきた。彼に応えるようにヴェインも唇に唇を重ねる。初めてのキス。優しく、温かい、そんな口付けだった。

ちようどそんなタイミングのことである。突然テラスから見える街並みから火の手が上がったのは……。同時に爆発音のようなものも響き渡る。

「な、なんだ!!」

慌てて唇を離し、二人で音が聞こえてきた方を見る。

「どうした!!」

やはり音を聞いたらしい獣人達がテラスに出てきた。イツナやラミイも……。

「火の手？ なんじゃ？ 何が起きた？」

「あ……あれ……敵？」

イツナの疑問に答えるように、街並みを見つめながらリンクが呟く。この言葉にヴェインも目を凝らして街を見る。すると確かにそこには敵がいた。武装した連中が暴れている。剣を振り回し、住民達を斬り付けていた。中には魔法のようなものを使っている者もいる。

爆発はその魔法によって引き起こされていた。

「敵軍が侵入したのですか？ それとも……受け入れた捕虜達が!？」

「いや、違う」

ラミイの言葉にヴェインは首を横に振った。

「あれは敵じゃない。あれは……ウチの兵達だ」

一目見れば分かる。暴れているのは共に敵と戦ってきた味方だった……。

「反乱……ということなのですか？」

呆然とラミイが呟く。

*

「オラオラオラアアアアッ!!」

王都の街中を疾駆しつつ、ヴェインは棍棒を振り回す。一撃ごとに暴れる獣人達を昏倒させていった。その力は圧倒的だ。同じ獣人同士とは思えない程身体能力には差がある。それには理由があった。

ヴェインは普通の獣人ではない。イヅナの——九尾の加護のもとにあるのだ。

イヅナが持つ九本の尻尾。その一本一本に強大な力が込められている。長い年月をかけてイヅナが蓄えた力だ。その力の一部をヴェインは与えられていた。九本の内三本の力を

振るうことができる。それ故にヴェインの力や防御力は他者の追隨を許さない程強大なものとなっていた。だから負けない。絶対に……。

「ガオオオオオッ!!」

しかし、圧倒的な力を見せつけられても反乱者達は一步も怯まなかった。それどころか本物の獣のような唸り声を上げ、ヴェインへと向かってくる。

（正気を失ってる。理由は分からないが……操られてるってことか……クソがつ!!）
チツと舌打ちをしつつ、棍棒を振るう。

「はあああああッ!!」

そんなヴェインに続くように、リンクを始めとした黒獣隊の面々も次々と反乱者達を倒していった。

（何にせよ、オレは一人じゃねえ。黒獣隊のみんなやリンクがいる。だから……何が、誰が、相手だろうが負けやしねえんだっ!!）

イヅナの力がある。リンクがいる——敗北する理由がない。

「ドラアアアッ!!」

王都中に響きそうな氣勢を上げ、目の前の敵を倒した。

だが、その瞬間——

「うあああああつ!!」

悲鳴が上がった。

「なんだ!？」

声が聞こえてきたのは後方だ。慌てて振り返る。

「——なっ!？」

そこでヴェインは驚きの声を上げることとなった。

理由は単純だ。仲間が仲間を襲っていたから……。黒獣隊の隊員が、同じ隊の隊員に対して攻撃を行っていた。

「な、どうした? 何をしてるお前らっ!!」

わけが分からず混乱の声を上げる。

「ガアアッ!!」

そんなヴェインにも仲間の一人が飛びかかってきた。

「——しまっ!!」

不意を突かれた形になる。回避が間に合わない。だが、そんな彼女を守るように——

「はあああああつ!!」

リンクが氣勢を上げた。ヴェインの前に立ち、突っ込んできた仲間の攻撃を躲すと、彼

の鳩尾みぞおちに一撃を決める。これにより暴走した仲間は意識を失った。

「はあつはあつはあ……ヴェイン……大丈夫？」

「あ……ああ、オレは大丈夫だ」

「そつか……よかった。その……何が何だか分からないけど、絶対大丈夫。ヴェインは僕が守るからね」

ニッコリとリンクは笑う。

その笑みに、一瞬胸が高鳴るのを感じ、顔を赤く染めつつ「それはオレの台詞だ」と言
って笑った。

(守る。そうだ。この国を守る。リンクを守る。守って見せる!!)
強い想いと共に、ギュッと強く棍棒を握り締めた。

だが――

「おっと、そこまでだ」

守り抜くという想いを嘲るような言葉が聞こえた。同時に「うぐつ」というリンクの鈍
い悲鳴も……。

「てめえ」

見ると一人の男が背後からリンクを羽交い締めにしていた。彼の口元を押さえつつ、ヴェインを睨み付けてくる。暴れている獣人達とは違う。明らかに正気だった。いや、意識のあり方だけではない。種族自体も獣人達とは異なっていた。

「……人間……」

そう、その男は間違いなくただの人間だった。

「どういうことだ？ 人間にはラミイ様が術をかけていたんじゃないか？」

人は獣人に敵意を持つことさえできないはずだが……。

「ああ、確かにその通りだ。しかし、人間全員をカバーできていないわけではない。この国に潜入する手段はいくらでもあるということだ……」

つまり、投降してきた捕虜達に紛れて入ったというわけではないのだろう。

「俺は……そうだな、この日のために……」
「魅了」が蔓延した時のために、潜入していた間者というわけだ」

ペラペラと男は言葉を続ける。

「魅了」……なんだそれは？」

「獣共を狂わせる術さ」

「何だか分からねえが……こんな作戦成功なんかさせねえぞ。お前らの企みは俺が潰す。」

そういうわけだからリンクを解放しろ。放さねえと……殺すぞ」

剥き出しの殺気を向ける。

「これは……凄まじい殺意だ。野生の肉食獣を前にしたような気分になるな。だが、そんな敵意を俺に向けてもいいのか？ こいつが死ぬことになるぞ」

リンクの存在を突きつけるような言葉を向けてくる。

「チッ」

これでは動くことができない。男の言葉はブラフではないだろう。殺すと決めれば殺す。それだけの覚悟と実力を持っていることは間違いない。獣人であるリンクを羽交い締めにできていること自体がその証明だ。相手がプロの軍人かそれに準ずるものであることは間違いないだろう。

（どうする？ オレから動くことはできねえぞ。この場合、誰かにあいつの不意を突いてもらうことが一番だが……）

部下達とは乱戦の最中にはぐれてしまっている。となると、次に考えられるのはリンク自身に脱出してもらうという手段。しかし、そのためにはリンクに獣人としての全力を出してもらう必要があるが……。

（残念だけど今日は新月なんだよな……）

月が出ていない。

狼型の獣人は丸いものを見ると獣の本能を全開にすることができる。普段以上の実力を発揮することが可能なのだ。しかし、月がない。となると他に何か丸いものは——と考えたところで、気がついた。一つだけ丸いものを持っていることに……。

(だが……これは……)

一瞬躊躇する。しかし、それは一瞬だった。

「リンク——見ろっ!!」

言葉と共に胸元を隠すプレートを外すと、伸縮性のあるインナーを伸ばした。首筋から自分の肌を露出する。これにより瑞々しく張りのある、まさに牛の様と形容しても過言ではない程大きな左乳房が剥き出しとなった。まん丸のお椀型。大きいのに一切垂れることなく張りのある乳房を見せつける。

「——っ!？」

口を押さえられたままのリンクが目を剥いた。その視線は間違いなく乳房へと向けられている。

(は、恥ずかしい……。こんな……裸を見せるなんてなんでもないって思ってたのに……)好きな相手に素肌を晒す——その事態にドキドキと胸が高鳴るのを感じた。

同時に変化が起きる。それはヴェインの身体にではない。リンクの身体にだ。彼の顔が変化する。人間の少年のような顔が変わる。本物の狼のように……。

「なにつ!!」

敵が驚きの声を上げた。

「今だリンク！ そいつを振り払え！ そのまま噛み殺せっ!!」

容赦ない命令を下す。

するとリンクはそれに従い、自分の身体を押しさえつけていた男の腕を振り払うと「ガールルルッ」と牙を剥いた。彼の小柄な身体から殺意が溢れ出す。ヴェインの肌さえ粟立つ程の殺気が……。

しかし、敵はそれだけの敵意を向けられても怯えるような素振りは見せなかった。それどころか嬉しそうに笑う。

「念の為の保険だったが上手くいったようだな」

「保険？ どういうことだ？」

「……こういうことだ。さあ、その女を倒せ」

笑いつつ、敵がリンクに命じる。瞬間、少年狼は動いた。敵の指示そのままに、ヴェインに飛びかかってくる。

「——なっ!!」

完全なる不意打ちだった。避ける間などない。九尾の加護を発動させる暇もない。リンクのタックルをモロに鳩尾で受けることになった。

「お……げっ!!」

強烈な一撃に吹き飛ばされる。幾度となく地面をバウンドするように転がった。

「な……んで……?」

わけが分からない。息が詰まる。どうして? なんで? リンクがオレを? 思考が疑問に支配される。

「そいつを拘束しながら、薬を打ったんだよ。獣人が獣本来の力を発揮した際、そいつを自在に操ることができるようになる——という薬をな。獣の力を発揮する瞬間、獣人の心は一瞬だが本能に支配される。その隙を突く薬というわけだ。はは、ははははっ!!」

勝ち誇ったように男は笑いつつ、ペラペラ説明してきた。

だが、その内容の半分も理解することができない。わけが分からぬまま「り……んく……ごめん……守ってやることができなかつた」という想いを抱きながら、ヴェインは意識を失った……。

*

理解できない状況だった。捕虜として投降してきた連中が何らかの理由で「制約」を破り反乱を起こしたというのならばまだ理解できる。だが、反乱軍は彼らではない。国を襲っているのは元々この国にいた獣人達だった。しかも、彼らが暴れているのは城の外だけではない。ヴェイン達が出撃するのと入れ替わるようなタイミングで、城中の兵達も暴れ出し始めていた。全員が全員というわけではない。だが、完全なる不意打ちである。結果、正気だった兵達もあっさりやられることとなってしまった。

しかし、どうして彼らが？ なんのために？ まるで分からない。ラミイの思考は混乱の渦の中に呑み込まれそうになってしまふ。

「しつかりせい！ お前が迷う姿を見せてどうする！！ 皆を守る。それがお前の仕事じゃろっ！！」

しかし、ギリギリのところまで救われた。女王に——母によって……。

「……すみません。恥ずかしいところを見せました」

冷静な思考力を取り戻す。やはりこの人には敵わない。そして、守り抜かねばならない——そんなことを考えつつ、頭を下げた。

「別に構わん。気持ちは妾も分かるからな。じゃが、この事態……非常に不味いぞ」

「分かっています。このままでは城が落ちるのも時間の問題でしょう。そこで……です。

イヅナ様は隠し通路を使ってこの場にいる非戦闘員と共に城外に脱出してください」
思考をフル回転させ、女王に指示を下す。

「……妾は？ その言い方から察するにラミイ……お前は別行動を取るつもりか？」
「そういうことです」

誤魔化すような素振りを見せることもなく、あっさりとラミイは頷いた。

「隠し通路は確かに知らぬ者ではなかなか発見することができない場所にあります。ですが、今回の敵は元々は味方。隠し通路のありかを知っている者もいるでしょう。つまり、逃げてもすぐ追いつかれる可能性があります。ですから、誰かが足止めしなければならぬ」

「それがお前だと？」

「私にはそれだけの力があります。それはイヅナ様が一番よくご存じでしょう？」

ラミイは宰相——文官である。だが、いざとなればどんな獣人よりも強い力を発揮して戦うことができるのだ。何故ならば力を授けてもらったから。九尾の力を……。そう、ラミイもヴェインと同じく九本の尾が持つ力を三本までだが発揮することができるのだ。

「……分かった。しかし、ならば妾も共に……」

「心強いお言葉ですが、それは駄目です。この場にいる非戦闘員を巻き込むわけにはいき

ませんか」

そう言つて広間に集まる人々をラミイは見回した。大勢の獣人達が不安そうな表情を浮かべている。中にはパーティーの式典の際イヅナに花束を渡したウサギ耳の少女もいる。そんな彼らの姿にイヅナは眉間に皺を寄せ、苦しそうな表情を浮かべた後「分かった」と頷いてくれた。

「ありがとうございます」

「……危うくなつたら逃げるのじゃぞ。絶対に死ぬな」

「分かってます。約束しますよイヅナ様……いえ、お母さん」

イヅナに対してラミイは優しく微笑んだ。

「来ましたね」

イヅナと別れ、一人広間に残ったラミイの前に数十人の獣人達が現れる。皆、知っている顔だ。言葉を交わしたこともある兵達だ。だが、以前のように言葉を交わすことはできない。彼らは明らかに正気を失っていた。

「グルルルウ……」

唸り声を漏らしている。その姿はとてもではないが獣人とはいえない。まさに獣そのも

のといつても過言ではないものだった。

（明らかに正気を失っていますね。となると、この反乱、やはり彼らの意思ではないと考えるのが自然か……。では原因は？ 何らかの術？）

敵を前に冷静に思考しようとする。だが、獣人達はその暇など与えないとばかりに一齐に飛びかかってきた。クマ、狼、ライオン、虎——戦闘に特化した獣人達が本能のままに襲い来る。

だが——

「遅いっ」

ラミイは身に着けていた神官服を脱ぎ捨てた。途端に身体にぴっちりフィットした黒と茶のスーツが現れる。スレンダーな身体のスーツをはつきりと確認できるスーツだ。所々にチーターを思わせるガラが浮かぶ衣装。掌サイズの胸を、キュツと引き締まった括くびれを、ツンツと上向きで張りのある尻を、獣人達の前で晒す。同時にタンツと地面を蹴った。

瞬間、ラミイの姿がフツと消える——いや、正確には消えたと思う程の速度でラミイは敵の中に突っ込んだ。

「オオオオッ!？」

正気を失った獣人達もまさかの事態に動揺するような素振りを見せる。

「申し訳ありませんが……眠ってもらいます」

一言口にすると共に、獣達の首筋や鳩尾に一撃を加えた。残像が見えそうな程の早さを持った一撃——避けることなどできはしない。この場にいた獣人達の意識を一方的に刈り取った。

「ふう……これで全部ですか……」

倒れ伏した獣人達の中心で息を吐く。

「音速のラミイ——二つ名は聞いたことがあったが、これは想像以上だな」

感嘆の声が聞こえた。そちらへと視線を移す。そこには一人の男が立っていた。

「……人間？ しかも……リストにない男……」

「リスト？」

ラミイの言葉に男は不思議そうに首を傾げる。

「投降し、我が国の住民となった人間の名前と顔はすべてリストアップして覚えている——ということですよ」

素直に疑問に対して答えた。

「なるほど。それは凄い。流石は王国の宰相殿だ」

「……貴方は……人間の問者ですね」

「まあそういうことです。いつか来るこの日のために潜入し、準備をしていた」

「間者の排除は行っていましたが……ハエはまだ残っていたということですか」

敵が王都に侵入している可能性は考慮しており、定期的に排除を行っていた。だが、すべてを除去することはできなかつたらしい。

「確かに……王国軍の追及はなかなかきついものがありましたよ。同志の大半は命を落としましたからね。ですが、そうした犠牲のお陰で私は生き延びることができました。そして、今日という日を迎えることができたのです」

実に嬉しそうに男は笑う。

「……今日という日……貴方達は一体何をしたのですか？」

「簡単なことですよ。この国の住人達に『魅了』をかけたのです。ゆつくりと、ジワジワと、一年という時間をかけてね」

疑問に男はあっさりと答えた。

魅了——聞いたことがある。確か魔法の名前のはずだ。かけられたものは指定された相手の命令に逆らうことができなくなるという魔法……。しかし、そう簡単にかけられる魔法ではない。確か被術者は術者と肌を重ねる必要があるはずだ。そんな魔法を住民の大半にかけることなど普通に考えれば……。

「まさか……」

そこまで思考してラミイは気付いた。

「投降してきた兵や獣人達が術者？」

「流石に察しいい」

「しかし、そんなことは不可能なはずです。彼らには、レ制約レをかけた。私達に敵対する意識を持つことなど……」

「そう、不可能だ。ですが、敵対する意識を持っていなければ問題は無い。我々が使ったレ魅了レはただの魅了ではない。今回の作戦のために特別にあつらえた新魔法なのです。術者も被術者なのです。言ってみればそうですね……病気みたいなものです」

「病気？ そうか……」

その一言でラミイは敵が取った手段に気付いた。

「投降者達にも予めあらかじ魅了レがかけられていた。その投降者と接触を持ったものにもそのレ魅了レがかけられる。そしてまた、新たな被験者となった者と関係を持つと……」

「そういうわけです。時間をかけ、ジワジワと被術者を増やしていったというワケですよ。今日のような大反乱を起こせる程の人数をね」

「ゲスですね……」

「我々が勝つためです」

男は勝ち誇る。

それに対しラミイはしばらく奥歯を悔しげに噛んだ後、何度か深呼吸をするとすぐに静かな表情に戻った。

「その顔……思ったよりも冷静ですね」

「……ええ、私は冷静です。種明かしがされた以上、この事態を解決することはできますから。結局は「解呪」の魔法をかければいい。ただそれだけの話です」

「確かにその通りだ。しかし、それができますかな」

パチンツと男は指を鳴らす。すると広間に新たな獣人達がなだれ込んできた。その数は先程までとは比べものにならない。五〇人近くはいるだろうか？ それだけの獣人達が敵意を持った視線でラミイを睨み付けてくる。

「この数を突破できませんか？ たった一人で……」

小馬鹿にするようにヘラヘラと男は笑った。

そんな敵に対し「もちろん、勝てますよ」ラミイは静かに笑った。

「……え？」

想定外の返事だったのか、男の表情が凍る。

「確かに一人では勝てませんね。しかし、私はイツナ様に九尾の力をいただいています。ですから……こういうこともできるんですよ」

言葉と同時にラミイは九尾の力を解放した。

刹那、ラミイの身体が分身する。一体、二体、三体、四体——五体……。

「分身だと!? まさか……こんな魔術聞いたことなど……」

「これは魔術ではありません。どちらかというと妖術に分類されるものですよ。まあ、どちらにせよ倒されるだけの貴方には関係ないことですが」

語りつつ、それぞれのラミイが構えを取る。

「申し訳ありませんが一瞬で終わらせます。国の皆を助けるために……」

その言葉と同時に、五体のラミイが一斉に床を蹴った。先程同様姿が消える。五体それぞれが音速に近い速度で敵の群れへと飛び込んだ。

*

「さあ、終わりです」

多くの獣人達が倒れ伏す中、五体のラミイは人間の男へと冷たい視線を向ける。彼の周囲には既に四体の獣人しか存在してはいなかった。

四体程度では盾にもならない。これですべて終わりだ——冷たい視線で男を射る。

その瞬間だった。男が突然「死ねえ」と叫んだのは……。

するとその叫びに呼応するように一体の獣人が自らの首に手をかけたかと思うと、ゴキツとそれを折った。

「——なっ!？」

唐突すぎる事態にラミイは瞳を見開く。

そんな彼女の前で、首を折った獣人は崩れ落ち——死んだ。

「な……貴方……一体何を？ 何故……こんなことを!？」

国民の死に呆然としつつ問う。

すると男は笑みを浮かべると「もちろん、貴方を捕らえるためですよ」と言って笑った。

「私を捕らえるため……?」

「ええ、そうです。簡単なことですよ。人質です。貴方が私を倒そうとするのなら、他のものにも私は命じます。死ね——とね」

冷や汗を垂れ流しつつ、男はべらべらと自分の意図を伝えてくる。

「……そんなものが私に通用するだけでも？ 私は目の前の命だけではない。この国に住まうすべての国民を守らねばならない立場なのですよ」

多くのものを守るためならば、少ない犠牲には目を閉じる——ということを言外に伝え

る。すると男は「死ね」と再び呟いた。

それに反応し、新たな獣人が自分を殺す。自身の首の骨を折り、広間の床に崩れ落ちた。

「だから……それは無意味だと！」

「本当に？ 本当に無意味ですか？ なら、それを確かめます。もう一匹にも……」

新たな獣人へと男は視線を移す。

その視線にラミイは「やめろっ」と声を上げた。

「やめろ？ ならば……くく、分身を消してください。そして……これを付けてください」

言葉と共に男は首輪を取り出す。獣人をスレイブとして操るための首輪を……。

「そんなこと……」

「できませんか？ ならば……また犠牲者が出るだけだ」

勝ち誇るような言葉を敵は向けてくる。

そんな男に対し、ラミイは動き出すことができなかった。

ギリッと唇を噛みつつ、分身を消す。

（すみません……お母さん……）

できることは、心の中で母に謝罪することだけだった……。

三章 陵辱の始まり

「ケダモノだ！ よくも俺達の仲間を殺してくれたな!!」

「畜生如きが人間様に逆らいやがって！ お前らは俺達の奴隷に過ぎないんだよ!! それをたっぷりと思い知りやがれ！」

捕らえられたイヅナはラミイやヴェイン、それに多数の仲間達と共に、檻に入れられた状態で、パリスールからハルネシア王都ハルシオンへと連行された。その間、街道に集まった人間達に散々罵倒された。石を投げつけられた。

最悪な状況。しかし、首に付けられた首輪によつて力を封じられてしまっているため、抵抗などできない。いや、それでも本来の力があれば首輪の魔力如きに負けるイヅナではなかった。けれど、身体にはまだ破魔の矢によつて受けた封印が効いてしまっている。そのせいで本来の実力が発揮できない。それにより、首輪にも抗うことはできなかった。

ただ見世物のように連れて行かれる。これから売り捌かれる奴隷のような気分だった。

*

王都ハルシオンに到着するなり、ヴェインはラミイと共にハルシオン王国軍兵舎へと連

れて来られた。

兵舎の地下——地下牢のような場所にヴェインは拘束される。因みにこの場にいるのはヴェイン一人だ。ラミイは兵舎内の別の場所に連れて行かれた。

両手両脚を鎖で固定された状態で、地下牢中央に立たされる。両腕、両脚を左右に大きく開くような体勢だ。身に着けている鎧はポロポロで、左胸の部分は完全に壊れてしまっている。お陰でインナー越しに乳房を見られてしまうという状態だった。ぴっちり肌に貼り付いたインナースーツ。胸の形がはつきりと分かってしまう。そのような状態を兵達がニヤニヤと笑いながら見つめてくる。呼吸に合わせて上下する乳房の有様に息を荒くする男達……。状況は最悪だった。見られているだけで身体が穢されるような気分になる。

(畜生……。なんとか脱出を……。ラミイを助けて、一緒にイヅナ様を救わねえと……。それに……。リンク……。)

恋人になったばかりの幼馴染みを思い出す。彼は一体どこに連れて行かれたのか？ 無事なのか？ もしリンクの身に何か起きていたら……。考えるだけで血の気が引いている。だからこそ、一秒でも早くこの状況から脱しなければならぬと思った。

(この程度の鎖——オレの力ならっ!!)

拳を強く握り締める。同時に奥歯を噛んだ。全身に力を込める。イヅナから与えられた

九尾の力を引き出し、鎖を引き千切ろうとした。ヴェインの力は通常状態でも人間十人分には相当するだろう。それが九尾の力により更に数倍にまで高められている。本来であれば鎖程度で止められるものではない。だが、鎖を引き千切ることはできなかった。首に嵌められた首輪による封印が予想以上にきつい。普段の十分の一の力さえ、発揮することができなかった。結果、がしやがしやと鎖を鳴らすことしかできない。

「抵抗なんか無駄だぞ。悪いがお前はもう終わりだ」

小馬鹿にするような言葉を敵が向けてくる。

「オレを舐めるなよ人間共。必ずお前らを皆殺しにしてやる!!」

状況は圧倒的に不利と言っている。それでも敵意を向け続ける。強烈な殺意を全身から噴出させつつ、刃のように鋭い瞳でこの場にいる十数人の敵兵達を睨んだ。

「これは……すげえ殺気だな。流石は獣人将軍ヴェイン殿だ」

「恐い恐い。マジで殺されちゃうかも」

が、男達は絶対優位な状況にあるためか、どんな視線も意に介さず笑う。どんなに威勢のいい言葉を吐いたところで、お前には何もできないんだ——彼らのそんな心が伝わってくるような言葉と表情だった。

「首輪を使ってご大層に封印をした上、鎖で拘束——ここまでしないとオレが恐いくせに、

よく笑っていられるもんだな。男のくせに恥ずかしくないのか？」

そんな彼らに対し、ヴェインも笑顔を浮かべて見せた。挑発の言葉を向ける。

「生意気なケダモノだ。だが、そう言っていられるのも今の内だぞ。すぐにお前を躡しけてやる。お前のことは俺達の好きにして構わないって陛下も仰ってくれたしな。お前はこれから俺達専属のスレイブになつてもらおう」

「躡けてスレイブにする？ はっ。オレがそんなものになるかよ」

「ああ、なるさ……いやでも——なっ!!」

そう言うと同時に男は拳を握り締めると、躊躇ためらうことなく全力でヴェインの腹筋を殴りつけてきた。鎧が隠しているのは胸と腰回りだけであり、下腹部はインナーに覆われているだけに過ぎない。割れた腹筋に敵の拳がモロに突き刺さった。

「どうだっ！」

ニタツと男が笑う。

それに対しヴェインも——

「それがどうした？」

笑って見せた。

「なにっ!？」

男は驚きの表情を浮かべる。まさか全力で殴ったというのに、笑顔を浮かべられるなどとは想像もしていなかったらしい。

「非力だな」

笑いつつ、侮蔑するような言葉を向けた。

「な、舐めるなっ!!」

男は怒りを発露させる。先程まで以上に強く拳を握り込み、再び鳩尾を殴りつけてきた。それも一発だけではない。二発、三発、四発——繰り返し拳を下腹に突き刺してくる。避けることができない状況であり、そのすべてを受けることとなった。

だが、苦しみの声など上げはしない。それどころか笑う。お前の攻撃など無意味だとも言うように、男に対して嘲りの笑みを向けた。

そうした笑みを向けられつつ、男は殴り続けてくる。しかし、全力での殴打などそれ程続けられるものではない。やがて男は疲れたのか振り上げていた腕を下ろすと、はあはあ
と肩で息をした。

「それで終わりか？」

疲労した男を嘲笑する。

「どうやら貴様ら如きではオレを躡けるなど不可能なようだな」

ただ笑みを浮かべるだけではない。牢獄中に「はははっ」という笑い声を響かせた。

これに男は一瞬悔しそうに唇をヒクヒクと震わせる。しかし、それは本当に一瞬だけのことだった。すぐに男は心を落ち着けるように数度深呼吸をすると「魔術部が分析した通りの結果だな」などと、意味深な言葉を口にする。

「分析通り？」

不穏な言葉にイヤな感じを覚える。

「そのままの言葉だ。パリスールと本格的な戦を開始してから二年。その間、我らは貴様に勝つために様々な分析をしてきた。その中には……ヴェインだったかな？ お前の力の秘密に関するものも含まれている。お前、イツナに九尾の力を与えられているだろ？」

「——っ!!」

ズバリ正解だった。思わず動揺する素振りを見せてしまう。

「正解みたいだな。くく、ということとは……九尾の言い伝えも本当の可能性が高いか」

「九尾の言い伝え？　なんだそれは？」

「……九尾は九本の尻尾を持っている。一本一本に強大な力を持った尻尾を……。九尾はその尻尾の力を己の眷属に与えることができる。与えられた眷属は九尾に近い力を発揮することができるようになる——という言い伝えだ。その言い伝え通り、力を与えられてい

るのだろうか？」

ジツとヴェインを見つめながら問うてくる。

「……ああ、その通りだ」

あつさりとヴェインは見つめる。隠すような真似はしない。何故ならば――

「で、だとしたらなんだっていうんだ？ てめえらに何ができる？」

分かったところで対処する術などないはずだから。

確かに首輪のせいで本来の実力を発揮することはできない。鎖を引き千切ることもこの状態では不可能だ。しかし、人間程度の腕力ならば防ぎきれる程度の防御力を発揮することはできている。この防御を破ることは容易いことではないはずだ。

「その態度……自信満々といったところだな。だが、それは甘い考えだぞ。分析というのはな、対処法を探すためのものなのだ。当然、九尾の力を封じる術も開発しているんだよ」

「……そんなの不可能だ……」

否定の言葉を口にする。不可能であって欲しい――とでも願うように……。

だが、願いは届かない。

「我らはイツナを捕らえたんだぞ。できないワケがないだろ」

言葉と共に男は札のようなものを取り出すと、ヴェインの剥き出しになった下腹部にそ

れを貼り付けてきた。すると札が輝きを放つ。地下牢中を照らす光。その中で札はドロリツと溶け、ヴェインの身体の中に入ってきた。

「な……なんだ？ うぐうつ？ 何をした？」

札の消滅と共に、輝きは消える。一体今のはなんだったのか？ 戸惑いつつ男を見つめた。その視線に対して男は笑いつつ「すぐに分かるさ」と口にしたかと思うと、再び拳を握り締め、ヴェインの割れた腹筋を殴りつけてきた。

「がはっ!!」

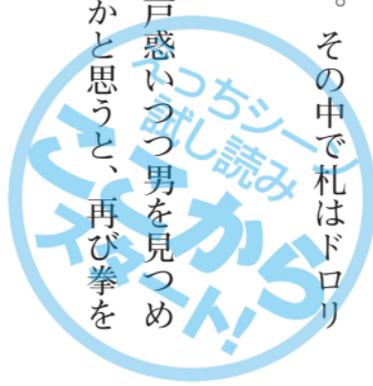
瞬間、凄まじい痛みが走る。腹を貫かれるような鈍い痛みだ。走る衝撃にヴェインは身体をくの字に曲げる。それと共に吐き気がわき上がってきた。胃の内容物が逆流してくる。これを止める術などない。

「おえっ！ おええええええっ!!」

この場には十数人の敵がいる。戦士として敵の前で不様な姿など見せてはならない。だが、どうしようもなかった。口から胃液を吐き出す。男達の前でゲロゲロと盛大に吐瀉としゃした。

「ゲロしやがった……」

「汚ねえなあ」



この有様を男達が嘲笑してくる。我慢ならない笑い声だった。だが、何もできない。笑われながらも「うえっ……かつは……あぐあああ……」と、ただ吐き続けることしか……。

「気分はどうだ？」

吐瀉を終えたヴェインに敵が囁きかけてくる。満面の笑みで……。

「はつく……はあつはあつはあつ……な……何をした？ てめえ……お、オレに……はぐうう……オレに何を……」

口端から涎を垂れ流しつつ、痛みで身体を震わせながら、それでも弱いところは見せまいと必死に男を睨み、問うた。

「破魔の力だよ」

問いかけに男はあつさりと答える。

「イヅナを封じるための破魔の矢——それを開発する際に生み出した副産物である破魔の札を使ったんだ。それで九尾の力を封じた。あくまでも副産物。札自体は試作品にしか過ぎない。だが、効果の方は絶大のようだ——なっ!!」

言葉と共に再び下腹を殴ってくる。

「あぐあつ!!」



「……………」

「返事をする気力もないか……。だが、この程度で終わりだと思ふなよ。貴様にはたつぷりお返しをしてやらないといけないからな。これまで俺達の仲間を沢山殺してくれたお返しを——なあつ!!」

またしても拳が振るわれる。再び走る痛みに「おぼえつ」と叫びた。その一撃を契機にまたしても連続殴打が始まる。下腹部のみを集中的に幾度も幾度も……。これに対しヴェインができたことは、先程同様悲鳴や呻きを上げ続けることだけだった。

「気分はどうだあ？」

拳が止まる。疲れたらしく少し肩で息をしながら、問いかけを向けてきた。

「あぐうう……はあつ……はあつ……はあつ……はああ……」

（このままじゃ……ま……ずい……）

呼吸をすることさえ辛い。意識を手放してしまいたくなる程の苦しみだった。このまま殴り殺されてしまうのではないかとさえ思ってしまう。

「かなりきつそうだな。やめて欲しいか？ もう殴らないで欲しいか？」

苦しそうな姿を嘲笑あざわらいつつ、問いかけを重ねてきた。正直こんな問いには答えたくなどない。けれど、このまま殴打を続行されたくはなかった。だから悔しさを覚えつつも、無

言で首を縦に振る。

「そうかそうか、やめて欲しいか。ならば……誓うか？」

「ち……かう……？ なに……をだ？」

「簡単なことだ。俺達のスレイブになることをだよ。俺達の所有物になることを誓えば、許してやるぞ。拘束も外してやる。どうだ？ 誓うか？」

痛みで俯き気味になっているヴェインの顔を下から覗き込むように見つめながら、そのような言葉を向けてきた。

「なっ！ ふ……ふざけるなっ!! スレイブになることを誓うだと？ そんなこと……で……ふううっ……できるわけが……」

人に忠誠を誓う。飼われているペットのように、飼育されている家畜のように——そんなことまっぴらごめんだった。ヴェインには矜持きやうじがある。獣人としての矜持が……。

「ならばまだ続けるぞ。もつと殴りたいのか？」

見せつけるように拳を握り締めてきた。その態度や言葉に、一瞬痛みを思い出し、反射的に身体を硬くする。だが、それは一瞬だけだった。すぐさま表情を鋭く引き締めると「奴隷になるくらいなら死んだほうがマシだ」と伝えた。

「なるほど。ケダモノとはいえ流石は一国の將軍だな。その意思……痛めつけるだけで碎

くのは厳しそうだな」

「ああ……不可能だ……」

「そうか、ならば……くく、我らのスレイブになることを選ぶということが、どれだけ素晴らしいのかをお前に教えてやる。オイ」

言葉と共に男は背後に控えていた別の男に声をかける。すると声をかけられた男が「解放」と呟いた。瞬間、言葉に反応するように首輪を通じて魔力のようなものがヴェインの身体に流れ込んできた。

「な……うくあつ！　なんだこれは？　うつく……くうううつ!!」

全身に魔力が広がる。身体中を侵食されていくような気分だった。

「何を？　貴様……これは一体何だ？　何をした!!」

「すぐに分かるさ」

疑問に対して男は短く呟くと、再び拳を握り締め、ヴェインの腹を殴りつけてきた。

「んおおおつ！」

当然のように再び痛みが走る。だが、今回感じたものはそれだけではなかった。

「な……なんだ？」

確かに痛い。呼吸さえも阻害される程の痛みだ。けれど、感じるものは痛みだけじゃな

い。殴られた瞬間、痛み以上に身体が蕩けるような心地よさにも似た感覚に陥った。

（ち、違う。あり得ない！ そんなことあるはずない！ 気のせい！ 気のせいだ!!）
慌てて心の中で否定する。否定せざるを得ない。何故ならば、あつてはならないことだから……。殴打に心地よさを感じることなど……。

「どうした？ 動揺してるな？ もしかして、殴られて気持ちよくなってしまったか？」
こちらが何を感じているのかを知っているような言葉を向けてくる。やはり先程の魔力によって引き起こされている現象らしい。けれど、認めることなどできない。敵の思い通りになるなどまっぴらだった。

「そんなこと……あるわけが……な……ないだろ……」
否定の言葉を口にする。

「そうか……これでもか？」

だが、そんなヴェインを嘲笑うように、またしても殴りつけてきた。それも一回ではない。これまでもそうしてきたように、連続殴打してくる。腹筋に拳をめり込ませてくる。

この一撃一撃に、先程同様「おほっ！」「くほおおっ！」「んふうううっ!!」ヴェインは呻くこととなった。だが、先程までとは違う点がある。それは感じるものが痛みだけではないという点だ。

（なんでだ？ どうして？ 身体が……熱くなる……。殴られるたびに……。疼く。腹が……いや、腹だけじゃない。あそこが……。それに……。なんだ？ 胸が……。熱くなる!!）

全身が火照り出す。発熱でもしているかのようだ。特に熱いのは鎧に隠された秘部と胸。股間部が疼く。殴られるたびに胸が張っていくような気がした。

「なんだ……。これ……。？ どうして？ ほおおおおつ！ おふあああつ!! な……。なく……。ふぐうつ！ 殴られてるだけなのに……。どんどん……。身体……。熱く……。それに……。胸が……。なんだ？ 張って……。ああ……。ジンジンするう」

「胸が張っている？ となると、鎧やらインナーで締めつけたままだと苦しそうだな。よし、俺が楽にしてやろう」

言葉と共に、剥き出しの左胸インナーに手をかけたかと思うと、無理矢理引き剥がしてきた。ビリビリッとインナーが引き裂かれる。結果、ブルンツと男達の前に左乳房を晒すことになった。瑞々しい褐色の胸が弾むように剥き出しとなる。黒い肌。そんな肌に彩りを添えるようなピンク色の乳輪。そして、勃起した乳首が……。男達が一斉に歓声を上げる。

「あ、み、見るなああつ!!」

男の前で肌を晒すなど、あつてはならないことだ。女として——そして、リンクの恋人

として……。隠さねばならない。男達の目には触れないように……。けれど、両腕を拘束された状態では不可能だった。

「デカイ胸だな。まさに牛の乳だ。この胸が揺れる様を見せてくれ——よっ!!」

再び下腹部を殴ってくる。

「おほおおおっ!!」

ブルンツと胸が大きく揺れる程の一撃だった。瞬間、更に胸が張るような感じがした。同時に何か熱いものが身体の内から乳首に向かってわき上がって来るような感覚に陥る。

「なんだ？ これ……。何か……。来る。だ、駄目だ……。これは……。駄目だああ!!」

何だか恐い。わき上がって来る熱い何かを、必死に抑え込もうとする。

「オラあああっ!!」

しかし、そんな努力を嘲笑うように、これまで以上の力で下腹に拳を突き刺してきた。

「んひっ！ あ……。これ……。駄目だ！ く……。来るっ！ おおおっ！ 来るううっ!!」

耐えようという想いを粉碎するような一撃。乳房に感じる熱感が膨れ上がる。刹那——

ブシューウウウツ!!

「んひっ！ はひっ！ あっあっ——んはあああっ!!」

乳頭から乳白色の液体が噴出した。

四章 ラミイの破瓜

「どうだ？ 気持ちいいか？ んんっ？」

兵舎の中庭に置かれた拘束台——そこにラミイは繋がれていた。首と腕に嵌められたギロチン台を思わせる枷により、上半身を曲げて腰を突き出すというような体勢を取らされている。一応スーツこそ身に着けたままではある。けれど、スーツの股間部には切れ目が入れられていた。ぱっくりと秘部の所だけ開かれている。結果、ラミイの女性自身は剥き出し状態となってしまうていた。

露わになったピンク色の肉花弁。敵の手で大きく左右に開かれてしまっている。これにより、膣口や肉褻が敵の視界に晒されてしまう。集まった兵達がジロジロと見つめてくる。いや、ただ見つめるだけで満足などしない。容赦なく秘部に指を添え、クチュクチュと擦るように刺激を加えてきた。もちろん、指だけで満足などしない。唇を寄せ、舐めるなどという行為もしてくる。褻の一枚一枚をなぞるように、舌先で幾度も幾度も……。その上でニヤつきながら、感じているかと問うてきた。

「……………」

その問いにラミイは何も答えない。ただ、表情も動かさない。完全な無を貫いていた。この程度で感じるなどあり得ない——とでも言うように……。

「生意気な牝だ。処女のくせによお」

挑発するような言葉を男が向けてくる。

「処女？ マジか!？」

彼の言葉に反応したのは、ラミイではなく周囲の兵達だった。

「ああ、マジだ。ほら、見てみるよ」

仲間の問いに男は更に秘裂を大きく開く。左右に陰唇が引つ張られ、結果膣口もクパツと口を開けることとなった。これにより見られてしまう膣の中まで……。マジマジと視線を向けてくる男達。彼らの目には確かにラミイが純潔である証が映っていた。

「ホントに処女だな」

ゲラゲラと男達は笑う。

(ゲス……)

彼らの声を聞きながら、心の中で見下す。しかし、その感情を決して表には出さない。絶対的優位な相手に対して怒りを見せたところで、喜ばせる結果にしかならないからだ。不毛なことをするつもりはない。それよりも今はすべきことがある。

(集中です……力を集中させるんです……)

自分に言い聞かせつつ、身体の内にも眠る九尾の力を呼び起こそうとする。ラミイの首を拘束しているのは枷だけではない。例の首輪も付けられたままだ。これにより、まともに力を発揮することができなくなってしまっている。だが、完全に封じられているわけではない。僅かずつではあるけれど、力の集中は可能だった。それに賭ける。捕らえられた国民達を、何よりも、誰よりも大切なイヅナを、救うために……。

「おら、素直になれよ。気持ちいいだろ？」

ラミイのそうした想いを嘲笑うかのように、男が再び肉壁に唇を密着させてくる。舌先をくねらせ、ヒダヒダを舐め上げてきた。時には舌先を膣口に挿し込み、膣中をかき混ぜるように刺激してきたりもする。ぐつちゅぐつちゅぐつちゅ、じゅるるるう——という下品な音色を奏でながら……。

「んっふ……くっ……んふううっ……」

ラミイだって年頃の女だ。確かに男性経験自体はない。けれど、それなりに身体を持って余して自慰をしたことくらいはある。そのため、身体は性感を知っていた。しかも、首輪から流し込まれる魔力により、ラミイの肉体は普段よりも敏感に変えられてしまっている。結果、舌の動きに合わせて愉悅のようなものをどうしても感じてしまう自分がいた。チロ

チロと髀を刺激されると甘く痺れるような感覚になり、条件反射のように声を漏らしそうになってしまう。ヒクツヒクツと僅かではあるけれど、腰を震わせるなどということまで……。

だが、それでも、表情にはそれを一切現さない。生理現象で愛液を分泌させてしまいつつも、決して嬌声を漏らしたりもしなかった。

「濡らしてるくせに喘ぎ声一つ上げないな……。顔も無表情か……。これ、本当に首輪の効力が出ているのか？」

「それは間違いねえよ。魔力は問題なく出てる」

「それなのに耐えるか……。頑張るなあ。ケダモノとはいえ流石は宰相様つてところか……。仕方ねえ……。だったらあれを使うか」

（あれ……。？　なんですか？）

何だかイヤな予感をさせるような言葉だった。一体何をするつもりなのだろうか？

そんな疑念に答えるように、男はビンに入った葉のようなものを取り出すと、自身の口にそれを含んだ。その上で、無理矢理拘束されたラミイの唇に、自身の唇を重ねてくる。

「んんっ!？」

キスされるなど全くの予想外だった。あまりの出来事に流石のラミイも瞳を見開く。そ

の隙を突くように口腔に舌を挿し込んできた。同時に先程口に含んだ液体を流し込んでくる。

「むっふ……んんっ!!」

慌てて唇を閉じようとするが、既に液体は口内に流れ込んでしまっている。しかも、すぐさま男は唇を離してきた。これにより男の口に戻すこともできなくなってしまう。となると残された手段は吐き出すことだけだった。が、無理矢理男の手で口を閉じられてしまい、吐くこともできない。その上男は「さあ、飲まないとお前……死ぬぞ」とこちらの鼻まで摘まんできた。口と鼻を塞がれる。息ができない。窒息しそうになってしまう。

「飲めば手を離してやる」

最悪な状況だった。こんな男の言うことなど聞きたくない。しかし、命令に従わなければ窒息してしまう。敵に従うくらいならば死を——という覚悟はある。だが、まだ死ぬわけにはいかなかった。ラミイには救わねばならぬ人がいるから……。

(イヅナ様を助けるまでは……)

自分自身に言い聞かせ、悔しさに歯噛みしつつも嚙下えんげを始めた。流し込まれた液体を飲み干していく。味是最悪だ。苦い。それに生温かさが気持ち悪い。少しヌメツとした粘着質な感触もおぞましかった。ともすれば嘔吐えずき、吐きそうになってしまう。が、そんな感

情を抑え込み、ゴクゴクと最後の一滴まで胃の中に流し込んだ。

「う……うぷっ……」

「くく、全部飲んだな」

口を押さえていた手を離し、男はヘラヘラと笑った。

「……今飲ませたモノはなんですか？」

「すぐに分かるさ」

笑顔のまま、男は再びラミイの背後に回ると、先程と同じく秘部にキスをしてきた。もちろん口唇を押しつけてくるだけではない。舌を伸ばし、舐めてくる。襷を、膣口を、膣中を、グチュグチュと刺激してきた。

「んっは……はふっ……くふうっっ」

途端に性感が走る。それも、先程までよりも強い性感が……。されていることは最初と変わりはない。だというのに、明らかに伝わってくる愉悦は大きなものになっていた。

「……媚薬か……」

飲まされたモノの正体に気付く。

「そういうことだ。今の薬でおまえの感度は数倍にまで引き上げられた。さて、今度は耐えられるかな？」

勝ち誇ったように男は語る。同時により強く唇を押しつけてきたかと思うと、ジュルルルと下品な音を奏でて愛液を啜ってきた。

「んくっ！ ふんんんっ」

先程よりも大きく腰が震える。ラミイの頬も僅かではあるが紅潮した。

（だが——問題はありません。この程度の薬でどうにかなる私ではない。この隙に……）
薬に対する耐性はある。何があってもイヅナを守れるようにと、幼い頃から訓練をしてきた結果だ。毒味役にだってなれるよう、毒に対する耐性もつけている。そのお陰で、媚薬の効果がある程度抑えることはできていた。だから大丈夫。意識を集中することも可能だ。首輪の魔力による妨害をかくぐり、自分の身体の内にある九尾の力を引き出す。

（見つけました。イヅナ様の力……。これですっ!!）

自分の内にある三本の尻尾——その内一本に辿り着く。

（私に力を——お母さんっ!!）

強い願いを込めた。

「はあああああっ!!」

同時に力を解放する。

瞬間、この場に分身が現れた。自分自身の現し身が二体。

「な、なんだっ!？」

まさかの事態に兵達が慌てる。

『申し訳ありませんが……貴方達には死んでもらいます』

分身が静かに告げる。

『はああああっ!!』

それと共に動き出した。人間を遥かに超える速度で、彼らに接近する。素早い動きで男達の懐ふところに潜り込み、蹴り飛ばす。太股に下げたナイフを引き抜き、投げる。避けることもできず直撃を受けた男達が悲鳴を上げ、倒れ伏した。

「くそっ! 舐めやがって! 止める! 止めるおお!」

男達が武器を抜く。分身に向かって刃を振るってきた。だが、見えている。獣人の動体視力は敵の動きをスローモーションのように捉えていた。避けることなど容易い。僅かに身を振りよじ、攻撃を避けると共にカウンター気味に男の首に手刀を叩き込む。首という急所を打たれた敵兵は「ぐえっ」と鈍い悲鳴を上げ、意識を失った。

(この場にいる敵は十人足らず……。首輪のせいでまともに力を発揮できず、分身を二体しか作り出せませんでした……。この程度の数ならば問題ありません)

ラミイは己の勝利を確信する。

だが、それは間違いだった。

『あ……これは……な、なんですか？』

分身の一人が戸惑いの声を上げる。いや、一人だけではない。もう一人も『力が……抜けていきます……』そのような言葉を口にする、ガクツと膝を突いた。

「な……なんですか？ 一体何が？」

起きた事態が掴めず、ラミイは戸惑いの声を上げる。

「どうということだ？」

兵達も同様だったのか、無事だった連中が不思議そうな表情を浮かべた。

「ああ……なるほど、そういうことか」

だが、そんな中で一人だけがすべてを悟ったというような顔で笑う。

「そういうことってどういうことだよ？ これ、なんなんだ？」

首を捻りながらその兵に仲間が尋ねる。するとその男は「どうやらその分身連中には本
体程の耐性がないらしい」と口にした。

「耐性？」

「簡単なことだ。そこにいる牝の本体は首輪の魔力にも、俺が調合した媚薬にもある程度耐えているだろ？ 多分、魔力とか薬に対する耐性を幼い頃から訓練して得たんだろうな。」

しかし、分身にはそれだけの力がないってことだ。多分、首輪の魔力のせいでそうした耐性まで完全再現することはできなかったんだろう」

「どうやらこの兵士は魔術師らしい。スラスラと事態を説明する。」

「なるほど……いや、でもちよつとよく分からないぞ。耐性がないってのは納得できるが、別にこいつらに薬を打ってはいないぞ。分身には首輪だつて付いてないし」

仲間が疑問点を問う。すると魔術師らしき兵は「簡単なことだ」と笑った。

「多分、分身と本体はリンクしているんだろう。本体が受けている異変をそのまま分身も受けているんだ。つまり、媚薬と首輪の効果をな。結果、今のような状態になったというわけだろうな」

倒れた分身を嘲笑しつつ語る。

「へえ、なるほどな。つてことは、ちよつと待てよ。つまりこの分身達は媚薬の影響下にあるつてことか？」

分身に敵兵が欲情の視線を向ける。

（ま……不味いっ!!）

敵が何を考えているのか、すぐさまラミイは理解した。慌てて分身を消そうとする。

「おつと……そうはさせない——」
『遮断』

こちらの考えを読んだかのように、魔術兵が魔法を発動した。そのせいだろうか？ 分身を消すことができない。

「き……消えない……」

「悪いな。お前と分身の間にある魔力の流れだけ遮断させてもらった。これでお前は自分の意思で分身を消すことはできない。分身に込められた魔力が消滅するまでな……」

「そんなことが……」

「俺は結構優秀な魔術師なんだよ。くく……さて、そういうわけだ。この分身に力はない。こいつらも好きにできるってわけだ。お前ら、みんなで楽しもうぜ」

勝ち誇るような表情を魔術兵が浮かべる。そんな彼に同調するように、この場にいる兵達がおおーつと歓声を上げた。

*

『や……やめなさいっ!! 放しなさい! 私を……放すのですっ!! 放さなければ……私は貴方を許しません!!』

仰向け状態で敵兵に組み伏せられた分身の一人が声を上げる。

『殺す。これ以上したら……本当に殺しますよっ!!』

俯せ状態で敵兵にのし掛かられたもう一人の分身が殺気を噴出させた。

「ああ、恐い恐い」

だが、どれだけ殺気を向けようと、敵兵達は動じない。それどころかより嬉しそうな表情を浮かべつつ、分身のスーツに手をかけると、それを容赦なく引き裂いた。仰向けの分身は胸元部分を破かれる。もう一体は尻の部分が……。掌サイズのツンと上向いた胸や、ブリッと張りがあり、引き締まった尻が剥き出しになってしまう。男達の前に自分の素肌が……。分身の胸。分身の尻。そして本体の花弁——女にとって最も大切な部分が男達の視界に晒されることとなってしまふ。

「やっぱり濡れてるなあ」

分身達が身に着けているスーツのクロッチ部を見て、敵兵が笑う。彼の言葉通り、分身の秘部は愛液でしっとり濡れている。本体が愛撫を受けたことによる影響なのだろう。スーツのクロッチ部には染みができていた。

そんな秘部にスーツ越しではあるけれど指を這わせてくる。もちろん、触れるだけでは終わらない。グチュグチュグチュグチュと秘裂を上下に擦り、クロッチ部分にポチッと浮かび上がった陰核を指で転がすように刺激してきた。しかも、秘部を弄るだけでは満足しない。胸が剥き出しになった分身の乳房に唇を近づけてきたかと思うと、舌でペロペロと舐め回し始めてきた。剥き出しの乳首を舌で転がすように刺激してくる。同時に尻が剥き

出しになった分身の臀部でんぶに手を添えてきたかと思うと、捏ねくり回すようにムチムチのヒップを揉みしだくなどという行為もしてきた。インナー部分を引つ張って秘部を刺激してくるなどという行為まで……。クロッチで秘部を上下に擦り上げられてしまう。

『んっは……あっ！ あんんっ!!』

『んくっ！ や……やめっ！ んはああ……はっふ……くふうう……』

途端に分身達は喘ぎ声を上げる。

違う。それは分身だけには止まらない。

「なっ！ なんて？ あっは……んはっ！ あんんんっ!!」

拘束されたままのラミイ本体も、分身と同様に甘い悲鳴を上げた。自分自身の現し身が受けた快感が、そのまま肉体に伝わってくる。胸がジンジンと疼き、尻が火照り始めた。

「ど……これは……んくうう……どういうこと……ですか？ こんなこと……あ……あり得ないはずなのに……」

わけが分からず戸惑いの声を上げる。

確かに分身とは魔力的な繋がりはある。分身自体が本体に起きている事態に影響されることだってある。だが、その逆はあり得ないはずだった。分身はあくまでも分身でしかない。自分自身の影なのだ。それなのに何故？

「簡単なことだ。俺が魔術で分身が受けた影響を本体も受けるようにしたんだよ。魔術つてのは万能だなあ。魔術師になってよかったぜホント!!」

それが疑問に対する答えだった。

「本体のお前とは違って、こいつら分身には媚薬に対する耐性がない。そんなこいつらが受けた性感をお前もモロに受けることになる。さっきまでみたいな涼しい顔なんかできないぜ。絶対になあ」

ゲラゲラと笑いつつ、更に分身の秘部に対する愛撫を行ってきた。乳房に対する舌での刺激をより激しいものに変えてくる。一旦股間部から手を離すと、右胸に吸い付きつつ、左胸を捏ねくり回すように揉みしだいてきた。乳頭が吸われ、舌先で転がされる。

『だ……駄目です！ それは……駄目ですっ!! んはあああ！ 敏感……私の身体……敏感になりすぎてます!! こんな状態で胸……んくうう！ ち……乳首をそんなに刺激されたら……駄目！ こんな……私……か……簡単……に……あつふ……んはああ！ い……イクっ!! だって……しまいますうう！ 我慢……できない！ こんな胸……あああ……胸だけなのがいい!!』

乳房が唾液に塗れる。ただそれだけで、肉体はどうしようもない程に昂っていった。普段なら絶対にあり得ない程の快感。これに分身はあっさりと限界まで昇り詰めてしまう。

しかも、それは一人だけではなかった。

『あんん！ 擦れる……あそこ擦られて……。しかも……くひい！ お尻っ！ はあああ！ こ……肛門に……指が……挿入^{はい}って！ おおおお！ 挿入^{はい}って来るう』

分身の肛門に指が挿入される。しかも、ただ挿入^{はい}れるだけでは終わらない。かき混ぜるように指を蠢^{うごめ}かし、直腸を擦り上げてきた。

『ふほおおお！ こんな……信じられない。お尻……お尻なのに!! 嘘です。私が……この私が……んふううう！ 抑えられない！ 気持ちいいのを！ お尻な……んかで……感じて……おっおっ！ 感じてしまつて……いますうう！ これ……ああ……無理……抑え……はふうう……抑えら……れ……ませんんっ!!』

尻の穴を弄られるだけで甘い感覚が広がる。本来ならば排泄するためだけの器官でしかないというのに、愉悦としか言えない感覚をどうしても覚えてしまう。もう一人の分身も同じように限界に昇り詰めていった。

「あつは……やつ！ んんん！ 駄目……です。耐えて……お願いですから……くふう！ た……えてえええっ!!」

分身達の快感が流れ込んでくる。本体であるラミイ自身も拘束具に捕らわれたまま、耐え難い愉悦に昇り詰めていった。別に自分自身に何かをされているわけではない。だとい



うのに、直接乳房や尻を愛撫されているような感覚に陥る。しかも、愛撫の上に愛撫を重ねられているような気分にはえなる。全身の感覚がなくなりそうな程の快感だった。

『い……………。駄目…………耐えられない！ あああ……………こんなの……………流されては……………だ……………め……………なの……………もうっ！！ んん！ もうううっ！！』

『あつは……………んはあああ！ やああ……………出る！！ これ……………出ちゃいますうう』

「んふううう！ あつは……………んはあああ！ あつあつあつあつ——」

三人のラミイは同時に限界まで昇り詰め——

「『イック！ イクイク——イクううううっ！！』」

絶頂に至った。

ぶじよっ！ じよばあああああつ！！

「あひい！ これ……………おしっこ！ 嘘！ おしっこまで……………出てる！！ こんな……………嘘……………嘘おおお！ あつは……………んはあああ！ やああ……………止まらない。これ……………止められないひいひい！！」

強烈すぎる性感で膀胱を閉じていることもできなくなってしまう。三人のラミイはそれぞれ失禁した。肉悦に打ち震え「あつは……………んはああああ」と喘ぎ声を響かせながら、小便を撒き散らした……………。

「すげえイキッぶりだな。だが、まだまだだぞ。もつとだ。もつとイカせてやる」

だらしなく表情を蕩かせ、失禁するという不様すぎる姿。そんな有様に男達は更に興奮する。もつとラミイ達の痴態を見たい。性感を刻み込んでやりたい——そう言わんばかりの勢いで、肉棒を取り出すと、躊躇いなく分身の肉花卉に先端部を密着させた。

『んひんっ!!』

グチュツと伝わってくる熱気に分身がビクつく——それは本体も同様だった。

「あ……や……やめなさい。それは……それだけは……」

敵が何をしようとしているのかに当然気付く。慌てて彼らを止めようとした。だが、どんな言葉も届きはしない。それどころか「やめて」と訴える姿にすら興奮しているらしく、男は更に肉棒を膨れ上がらせつつ、容赦なく腰を突き出してきた。

どじゅっ! ずじゅっ! ぶぢいいいいっ!!

『はぎっ! んぎっ! ふぎいいいいいっ!!』

仰向け状態で拘束された分身の秘部に巨棒が突き立てられる。途端に本体の身体に痛みが走った。身体を引き裂かれていくような痛みが……。身体の中にある大切なものを引き裂かれような感覚を知ることとなる。

「あぐうう! 挿入^{はい}ってる。これ……んん!! 私の膣中に……硬いのが……熱いのが……

…は………いって………るううっ!!」

実際に挿入^いられたわけではない。だが、自分の身体が内側から押し開かれていくような感覚に、ラミイ本体は身悶えた。

「こっちもだぞっ!!」

しかも、破瓜の痛みは一度だけでは終わらない。俯せに拘束された分身の肉壺にもペニス^スが突き立てられた。

「あぐうう! またっ! 嘘っ!! またああああっ!!」

自分の目の前で自分の分身が犯される。その有様を見せつけられつつ、二度目の破瓜の痛みにラミイは拘束されたまま身悶えた。

「嘘です! こんな……二度も……処女を……あつぐ! んぐうう!」

「いや、二度じゃない。三度だぞ」

冷たい声が背後から聞こえた。そこには男が立っていた。剥き出しにした肉棒の先端部を、ラミイの秘部に押しつけようとしていた。

「三度つて……まさか……や……やめなさい。それは……そんなことをしたら……私は……貴方をゆ……許しません。絶対に……許しませんよ!!」

何をしようとしているのか理解する。血の気が引くような感覚に陥りつつ、必死に敵に

対して殺氣を向けた。だが、何もできない状況での殺氣など滑稽なだけでしかない。男は余裕の笑みを浮かべ「それは恐いなあ」などと口にしつつ、そうすることが当然とでもいうように腰を突き出してきた。

どじゅぶつ　じゅつぽ！　ずじゅつ！！　ずじゅぽおおつ！！

「ふぎいいいっ！！　ま……た……これ……また！　ああ……またあああ！！」

再び引き千切られる。刺し貫かれる——ラミイの純潔が……。胎内に広がる異物感。内側から内臓を圧迫されるような感覚が広がる。そうした状況に対してラミイにとれる術^{すべ}などない。ただされるがままに悲鳴を上げることしか、今のラミイにできることはなかった。

「気分はどうだ？　気持ちいいか？」

子宮に届く程奥まで肉棒を突き挿^い入れた男が微笑みかけてくる。

「そ……そんなわけ……ありません……。こんなただ……痛いだけです。だ……から……早く……ふぐうう！　早く……抜きなさい！　これを……抜くんですっ！！」

必死に抜けと口にする。言葉通り快感などはない。ただ痛いだけだった。

「そっか……痛いだけか……。でも、これでもそんなことが言えるかな？」

そんなラミイに対し、分身を犯す男が笑う。それと同時に彼がピストン運動を開始した。分身の肉壺を下ジユッドジユッドジユツと突き始める。かき混ぜ始める。子宮口

に肉先でキスをしてくる。先程まで処女だった相手に対する気遣いなど存在しない。ただ己の本能だけを満たそうとするようなピストンだった。本来ならば辛いだけの陵辱である。だというのに――

『あつひ！ それ！ 嘘……ああ……き、気持ちいい!! あつあつあつ！ そ……れ……
凄く……んひんん！ 凄くいい!! こんな……どうして？ 何故？ あああ……なんで私

……こんなに……気持ちよゆう』

分身はすぐさま喘ぎ始めた。破瓜の痛みなど一瞬でなくなってしまった――とでもいうような勢いで喘ぐ。快楽の悲鳴を響かせる。しかも、それは一体だけではない。もう一体の分身も男がピストンを始めた途端――

『あふう！ それ……ごりごり……んひんん！ 膣中……ゴリゴリされると……あつく……んくうう！ 気持ちよくなる。私……か……感じて……ああ……しまいます!! こんな……あんん！ 駄目なのに……否定できない！ あつあつあつ！ いいつ!! これ……ペニスで……膣中……グチャグチャされるの……いひいいつ』
同じように喘ぎだした。

気持ちがいい――それは決して言葉だけのものではない。実際彼女達は性感を覚えていた。それを証明するように、本体にも彼女達の肉悦が流れ込んでくる。

七章 大切な者達

イヅナはゼグードに連れられ、王城地下の牢獄に入った。そこいたのは――

「本当だ。本当にイヅナ様だ……」

数十人の獣人達。皆、パリスールの国民である。顔を見ればそれくらいのことはずぐに理解できた。彼らはイヅナの姿を見た途端、ざわつき始める。浮かべる表情は驚き――そして、興奮だった。

（何故じゃ？ どうして妾を見てこんな顔を？）

驚くのは分かる。喜ぶのも分かる。逆に悲しんだり、怒り出したりすることだって理解できる。しかし、興奮だけは分からなかった。何故自分を見て彼らが興奮するのか？ それがさっぱり理解できない。

「余は嘘などつかぬ。余は慈悲深き王だからな。だから貴様らも誓うな。我々人間のスレイブになることを」

イヅナの戸惑いなど無視するように、ゼグードは獣人達に語りかける。

「スレイブになるということは悪いことではない。我らに従えばこうして褒美もある。獣

人の幸福は我ら人間に従うことだ」

「な、何をふざけたことをっ!!」

ゼグードの言葉はイヅナにとつては聞き捨てならないものだった。当然抗議の声を上げる。けれど、ゼグードはまるで動じない。人を小馬鹿にするような笑みを向けてきたかと思うと、イヅナの背中を押してきた。これにより、イヅナは獣人達の中に入ることとなる。途端に彼らはイヅナの破れかけの衣装に手をかけてきたかと思うと、これを無理矢理引きずり下ろしてきた。皆の前に——イヅナにとつては子供のような大切な者達の前に、成長期の少女のような乳房を晒すこととなる。更に彼らは股間を隠すクロツチ部も横にずらしてきた。

「な、何をするっ!!」

乳房が、尻が、秘部が——皆の手で露わにされる。わけが分からない。何故国民達が自分にもこのような真似をするのかが理解できない。戸惑いの声を上げる。

「すみませんイヅナ様。ですが……俺達は決めたんです」

「決めた？ 何をじゃ？」

「もちろん……人間のスレイブになることをですよ」

「なっ!! お、お前達……何を馬鹿なことを！ スレイブになる？ それは……獣人とし

ての尊厳を捨てる行為だぞ！」

「尊厳……それがなんだというのですか。そんなもので俺達は生きていけない。そんなものじゃ幸せにはなれない。事実、我らは負けて、捕らわれることとなってしまった」

「だから……だから奴隷になることを選ぶと？」

「そうですよ。だって……奴隷に……スレイブになれば、確かに俺達は人間に酷使されることになるでしょう。ですが、その分こうしてご褒美ももらえるようになる。それって……凄く幸せなことじゃないですか？」

首輪を付けた状態で獣人は嬉々として語る。心の底から飼い犬になることを喜んでいるかのように……。

「ち、違う！ そのような幸せ……間違っておる!!」

「いいえ、間違つてないませんよ。だって……スレイブになることを決めたお陰で、俺達はずっと……そう、ずっと憧れてきたイヅナ様を犯すことができるのですから」

心の底から嬉しそうな笑みを獣人は浮かべた。

そして、陵辱が始まる……。

*

「おほおおお！ 尻！ くひいいい！ 尻に！ おっおっ！ 太い……太いものがああ！

くほおおお！」

メリメリメリと後背から肛門を犯される。侵入してくる太すぎる肉槍。今にも引き裂かれてしまいそうな程に肛門が拡張された。強烈な圧力に悲鳴を上げる。

「こわ……れる！ 妾の身体が！ 頼む……やめ！ やめよ！ 挿入れるな！ 抜け！ 抜けえええ！」

既に幾度となくゼグドによつて犯された肛門。けれど、身体があまりに小柄なせいで、未だに挿入に慣れることはできない。必死に抜いてくれと訴える。だが、誰も聞き入れてはくれない。それどころか「こつちもです」という言葉を向けてきたかと思うと――

「がっぽ……ぶぽっ！ おぼおおおっ!!」

口腔にも肉棒を挿入してきた。もちろん挿入だけでは終わらない。すぐさまピストン運動まで開始してくる。まるで本当に交尾でもしているかのような勢いで、腰を打ち振ってくる。ドジュッドジュッドジュツと幾度も幾度も喉奥を突かれることとなった。

「い……ぎ……できなっひ……ばぼッ！ ぶぼおおお！ じ……じぬっ！ ごりえ……わらわ……じんでじまう！ やべ！ やべよ！ おぼおおお！ やべるんじやああ！」

息が詰まる。直腸と喉奥を同時に刺し貫かれ、死んでしまうのではないか？ そのようなことを本気で考えてしまうような状況だった。そのことを必死に訴える。しかし、獣人

達には届かない。それどころか彼らはイツナの悲鳴に嬉しそうな表情さえ浮かべつつ、ペニスを肉穴に挿し込んだまま立ち上がった。

「ぼほおおおっ！」

小柄な身体が宙に浮く。前後の肉棒によってぶら下げられるという状況だった。そのせいで余計ペニスの感触を腸壁で感じる事となる。ピストンに合わせてより強く、肉壁を擦り上げられる事となった。

ばじゅんっばじゅんっばじゅんっ！

「ばびよおおお！ おっほ！ ぶびよっ！ ぼびよおおお!!」

抵抗などできはしない。自分にとって最も大切な存在である国民達にひたすら犯される。性処理玩具のように……。小さな身体が玩具のように揺さぶられた。自分は悪夢でも見ているのではないか？ とさえ思えるような状況だった。だが、これは紛れもない現実だ。

「我慢できないっ！ イツナ様！ 手で！ 俺のものを手で扱いてください！」

それを突きつけるように新たな獣人が肉棒を突きつけてくる。左右の手でペニスを握られることとなった。グジュウウツと先走り汁のヌメヌメとした感触が伝わってくる。おぞましい感覚だ。だが、逃げることはできない。膣や口と同じように掌も犯される。腰を振られ、ゴツゴツとした肉茎で擦り上げられる。しかも、そうした陵辱行為はそれだけで

は終わらなかつた。

「尻尾……イヅナ様の神聖な尻尾」

彼らは九本の尻尾を手にとって肉棒に巻き付けると、自分のペニスをシコシコと扱き始めた。先走り汁で艶やかな毛を濡らしながら……。

「おほっ！　しょ……しょれ……！　んおおお！　しょれは……くひいいい！　しょれは

……駄目じゃ！　やめ！　おっおっ！　やべよおおお！」

途端に身体中を電流のような刺激が走る。強烈な感覚に、イヅナは全身を震わせた。

「あ、イヅナ様……尻尾で感じていらっしやるのですね」

「お気持ちには分かります。尻尾には色々な感覚神経が集中していますからね。我々も結構敏感なんですよ。そうか……イヅナ様も我らと同じだったのか。まあ、とはいえ感じすぎですな。こんな状況で感じまくる……イヅナ様は変態だったのですね」

「それなら……もっと感じさせてあげますね」

駄目じゃ。やめよ。それ以上はするな——制止の言葉は逆効果しかもたらさない。獣人達は興奮の面持ちでピストン速度を上げてくる。イヅナに自分達の存在を刻み込もうとするかのように激しく……。

「ふひいいい！　おおお！　それ……だ……べじゃっ！　ごっぽ！　ぶぽおおお！　や……

べでぐれ……ぼっぼっぼっぼっぼっ!! わら……わりゃわは……こんにゃ……こんにゃのおおお!!」

大切な国民達に犯されるなど耐え難い。頼むから正気に戻ってくれと必死に訴える。だが、どんな言葉も興奮し、本物の獣のようになってしまった彼らには届かなかつた。

咆哮を上げつつ。ピストン速度を上げてくる。いや、それだけじゃない。一突きごとに肉棒を膨れ上がらせてきた。ペニス全体を痙攣させ始める。

「出します! あああ……イヅナ様に……イヅナ様に出しますうう!」

「飲んでください! たっぷりと!」

「ぶっかける! イヅナ様にいい!!」

遂には射精まで訴えてくる。濃厚になる牡の匂い。ペニスが不気味に膨れ上がる。

「や……だべ……だべじゃ! しょれは……しょれだけはああ!」

必死に願う。しかし、その願いを引き裂くように、腸奥に、喉奥に、肉槍がドジュンツと叩き付けられた。

「ぶぼおおおおおつ!!」

口と肛門——同時にかけられる圧力。まるで身体を貫通されてしまったかのような衝撃を覚える。あまりの事態に宝石のような瞳を痛々しい程に見開いた。その瞬間、射精が始

まる。ドビュッドビュッドビュツと直腸に、口腔に、白濁液が撃ち放たれた。

「ばぼっ！ ぶぼっ！ おぼおおおおおっ!!」

全身に熱気が染み込む。口内が一瞬で満たされた。直腸に熱汁が染み込んでくる。しかも、それだけでは終わらない。尻尾や手の感触を楽しんでいた男達も一斉に「くおおおお」と唸りつつ、白濁液を撃ち放ってきた。

「おびよおお！ おんっおんっ……おんんんんっ!!」

全身に精液が降りかかる。まるで精液のシャワーを浴びているかのようなだった。背中が白濁に塗れる。尻がぐっちよりと濡れた。髪にも牡汁が染み込む。当然尻尾も穢された。身体中が白に染まる。肌にも熱気が染み込んでくる。

（ああああ……熱い……。熱くて臭い汁が妾の身体に……。この熱さ……。これが快感に変わる。来る……。来てしまう……。あっ！ あああああ！）

初めて尻を犯されたあの日から既に一週間——あの日以後も毎日のように犯され続けてきた。そのせいで身体は性感を覚え込まされてしまっている。耐えなければならぬと理性では思っている、肉悦に抗うことができない。

「い……。いぶっ！ ぶぼおおお！ いっぐ……。おおお！ わりやわ……。いぐっ！ ふひい
いい！ いぐっ！ いぎゅううううっ!!」



結果、イヅナは絶頂に至った。ビクビク震えるペニスに合わせるように全身を痙攣させながら、快樂の頂に到達する。精液の海に沈んでいくような感覚の中で、歡喜の悲鳴を響かせた。

「ふひ……んひんんっ……」

意識が飛びそうになる程の愉悦に噎び泣く。このまますべてを忘れてこの快感の中に溶け、消えたい——そんなことさえ考えてしまうような心地よさだった。

「イヅナ様！ まだ……まだです！ 次は俺です!! 俺が……イヅナ様を犯しますう!!」
けれど休んでいる暇などない。先程射精した獣人と入れ替わるようにして、新たな男がイヅナの肛門にペニスを挿し込んできた。

どじゅうう！

「ふひっ！ んひいいい！ ま……またっ！ まだあああ！」

逞しい肉槍の感触が、再び直腸に刻まれる。しかも、それは肛門だけではない。

「おぼっ！ ぶぼおおっ!!」

当然のように未だ白濁液に塗れた口腔も犯された。もちろん挿入だけではない。

ずじゅぼっ！ じゅぼっ！ どじゅっどじゅっどじゅっどじゅっ——どじゅうううう！

「あぶばああ！ まっだ……うごぎ……ふひいいい！ う……ごぎ……らひたああ！ ぼ

っぽっ！ んじゅっぽ！ じゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽっ！ ずじゅぽおおお！」
ピストン運動も始まる。直腸を、口腔を新たな肉棒がかき混ぜてきた。これに対し抵抗する術など存在してはいない。されるがままに犯される。ズンズンと突かれる。結合部からビュッビュッと白濁液を噴出させ、逆流してくる精液を鼻からも垂れ流しながら、ひたすらイツナはくぐもった呻き声を漏らすのだった……。

「ぶ……り……挿入^{はい}らない！ もほ……無理……じゃ……のにいい！ まだ……まぢゃあ
ああ！ おっおっおっ——おびよおおお！」

ぶびゅばっ！ どびゆるるるう！

流し込まれる。白濁液を……。

「ばぶああああ！」

ぶっかけられる。精液を……。

「いぶ……まだ……いぐ！ ふおおお！ いぎゅっ！ いぎゅっ！ いぎゅううう!!」

絶頂させられる。肉悦の中で……。

何人も、何十人もの獣人達にひたすら犯され続けた。入れ替わり立ち替わり……。大切な者達に身体を穢され続けた……。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>